

ふるさと笠郷

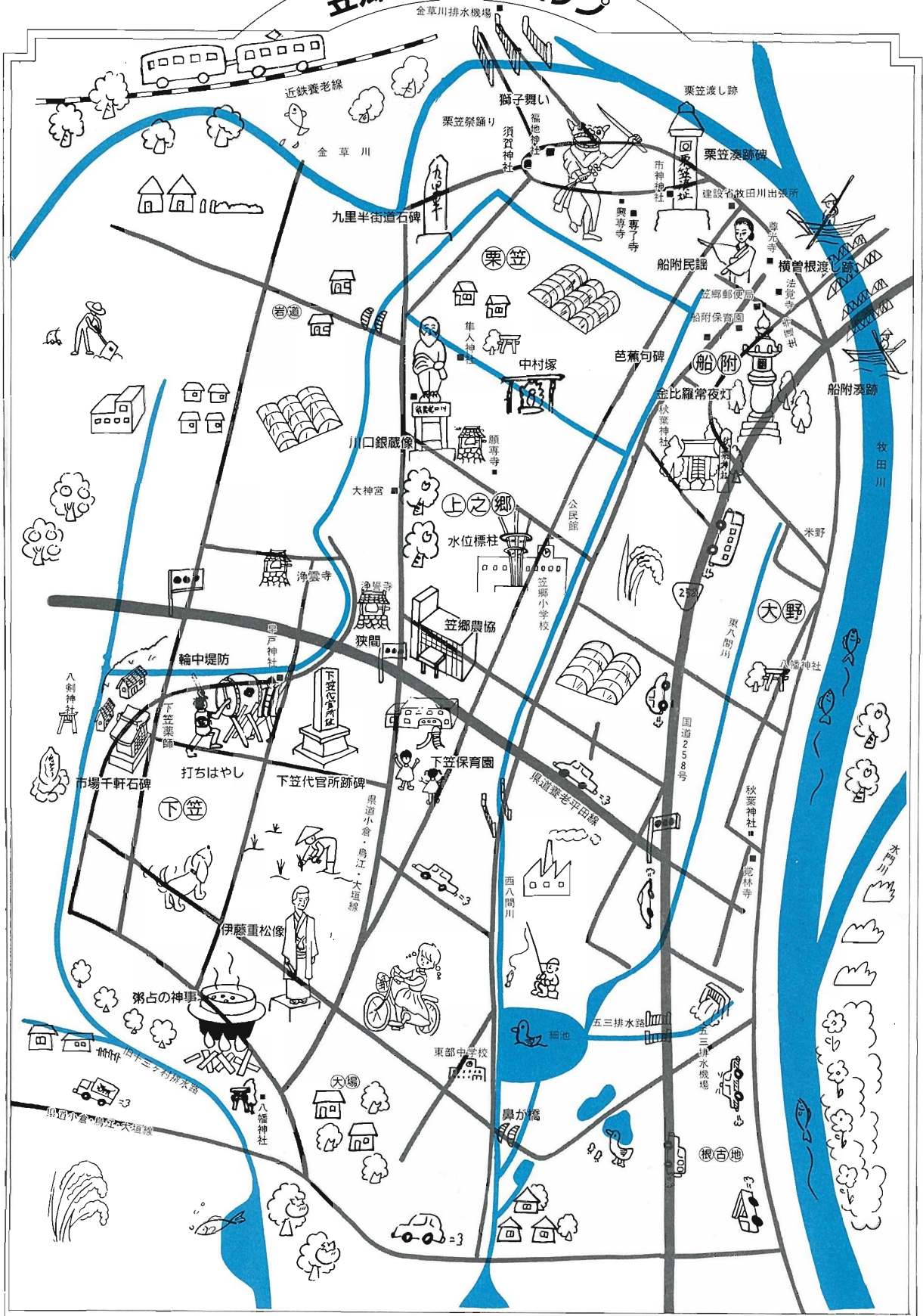
一帯長流接
碧天散簡斜
屋合青烟春
陽旭日秋蘆
月興属津頭
多少船

高辻芳中納言胤長卿



養老町立笠郷小学校・PTA
町制40周年記念実行委員会

金草川排水機場





はじめに

養老町立笠郷小学校長

水野 建

私たちの住んでいるこの笠郷校下は、今から三百六十年程昔に形作られた、下笠輪中そのまの範囲で現在に至っています。低地であった宿命から輪中を築き、常に水とたたかってきた先人の苦労と、二度の水害を乗り越えて干拓と耕地整理の血のにじむような努力の上に、この美しいふるさとも成り立っています。

このふるさとの歴史を知り、自然に親しみ、ふるさとを愛する子どももの育成と、三世代のふれ合いのきっかけになればと小冊子作成の企画をしていましたところ、町制四十周年の記念にもしていただき、感謝しています。

やがて二十一世紀の笠郷を受け継ぐ子どもたちが、たくましく成長することを願っています。

もくじ

○ ふるさとマップ	2
○ 校下航空写真	7
○ はじめに	18
一 笠郷のなりたち	23
二 水とのたたかい	28
三 ふるさとの自然	33
四 交通の今昔	41
五 教育のうつりかわり	49
六 史跡と文化財	
七 笠郷の昔話	
八 郷土を築いた人々	
○ あとがき	
○ 町民憲章と校歌	

表紙題字 養老町教育長 高木 正義
表紙 画 養老町指定 有形文化財

栗笠八景図巻より
(高橋嘉幸氏蔵)

一

① 笠郷のなりたち 大昔は海の底

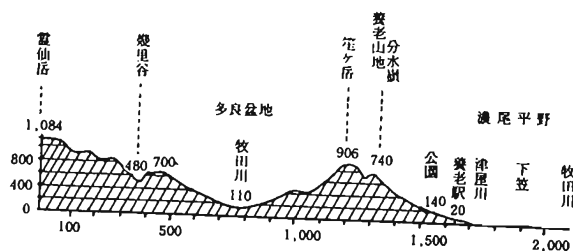
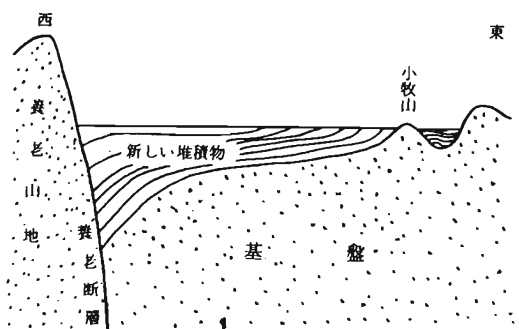
私たちの住んでいるふるさととは、どのようにして出来てきたのでしょうか。笠郷は濃尾平野の西南に位置する養老町の東部を占めています。

濃尾平野はもと海の下で、二億年前からだんだんと高くなって陸地となりました。しかし、一億年位以前に地殻面に大きな変化が起こって陸地が深く落ちこみ、再び海の底となってしまいました。養老山の東側が急な坂になっているのは、大地がすべりだして、落ち込んで出来たけずりあと（断層）です。

五千万年位昔からまた少しずつもり上がり、海の水が引いていきました。がまだこのあたりは海でした。一千万年位前に木曾川・長良川・伊尾川（今の揖斐川）・牧田川が生まれて土や砂を運び、それが海底に積って次第に濃尾平野を形作っていきました。

養老町は北部が高く、南東部が低く傾いています。そのため北部は早くから開けましたが、南東部にあたる笠郷や池辺は、土地が低くていつも水がついていたので、私たちの祖先が少しでも高い所を選んで住みつき、田畑を耕すようになったのは千年位以前からと思われます。

▲ 濃尾平野断面図

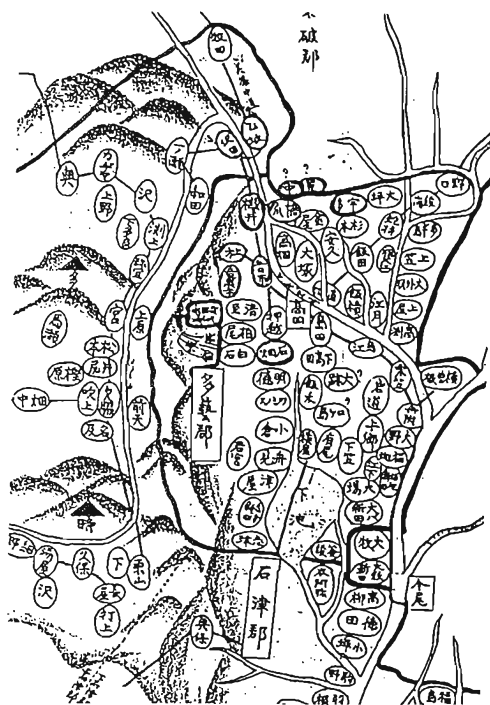


▲ 養老山地断面図

② 村々のはじまり

昔の牧田川は決まった川の路がなく、低い所へ向って自由に流れていましたが、長い間かかって土や砂を運んでいるうちに、川の路の両側が次第に高くなって堤の役目をするようになりました。これを自然堤防といいます。

栗笠と船附は牧田川の自然堤防の上に、大野は伊尾川（明治の始め頃まではこの字が多く使われた）の自然堤防の上に生まれました。上之郷と下笠は、牧田川が運んできた土や砂が作った扇のような土地（扇状地）のわずかに高い所にありました。しかし江戸時代までは今のような美しい平野でなくて常に水のある湿地でしたが、今から三百六十年位前に、江戸幕府は新しく田を開くことを勧めたので、笠郷地区でも堤を作り新田を開発して、次第に今のような村々が出来てきました。



▲ 元禄時代の村絵図

中でも栗笠は一番古く、和名抄という本に富上郷と書かれています。富上は富土のまちがいで、福地神社も現在より南の方にありました。船附は今の米野あたりが中心でしたが、中世から近世にかけて現在の地に川湊の一つとして栗笠と共に栄えました。上之郷は天領といって江戸幕府が直接に治めた村で、何事につけて優位であったと伝えられています。

③ 笠郷のいわれ

江戸時代以前から今の栗笠の北に上笠が、南に下笠の村が南北に並び、すでに笠の里でした。笠の地名は、笠のように土地がやや盛り上がった所につけられました。

明治十七年に船附・横曾根・烏江・栗笠・大野の各村が連合して、船附に役場を作り、また下笠に下笠村役場が作られました。明治三十年（百年位以前）には船附・栗笠・上之郷・下笠・大野の五か村が合併して笠郷村が出来ました。

この時、お米が五千石位取れるので五千石村にしようという意見もありましたが、この辺りはお百姓さんが笠をかぶって働く姿が多く見られることから、農業が盛んな所という意味で、笠の郷つまり笠郷と名づけられました。今でも農業が大切にされています。



▶ 明治二十六年に作られた地図
(下笠輪中が堤防でかこまれています)

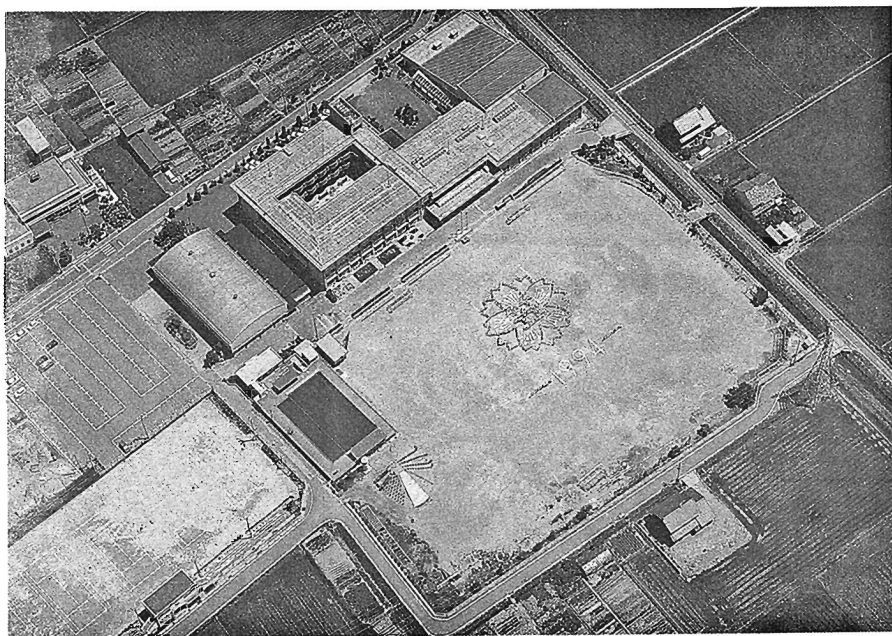
④ 現在のようす

学校の屋上から**東**を眺めると、南北の国道二五八号線に車が行きかい活気があります。更に東には大野と船附の一部の集落が牧田川の堤防に沿うように並んで、のどかな田園風景となっています。

西遠方には養老山地が浮かび、右に象尾山と伊吹山へ続いています。すぐ手前に笠郷幼稚園とテニスコートが目に入り、その向こうに上之郷と下笠の一部の家々が見えます。

南には美田が広がり、西八間川の彼方にカントリーエレベーターと東部中学校が建っていて、手前に県道が横たわっています。更に南には三ツ屋の集落があります。

北に目を向けるとやはり美田が続いて、牧田川の堤防がゆったりと横たわっています。左には栗笠、西には船附の集落が点在していて、昔ながらの静かな雰囲気वादただよっています。



▲ 平成6年5月18日撮影

⑤

校舎屋上より

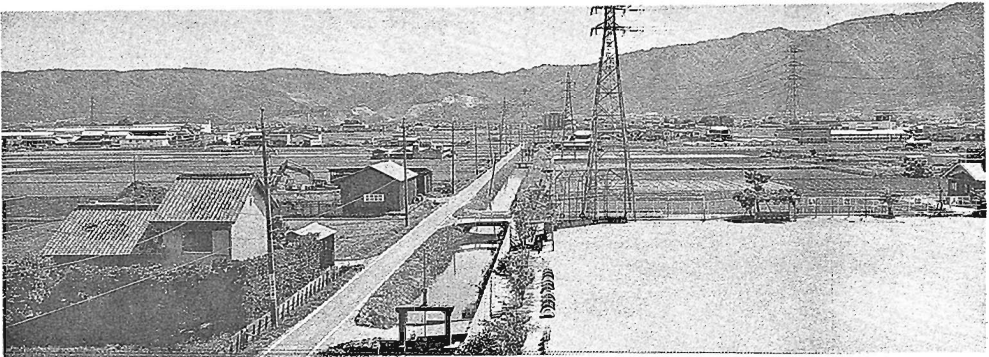
東



西



南



北

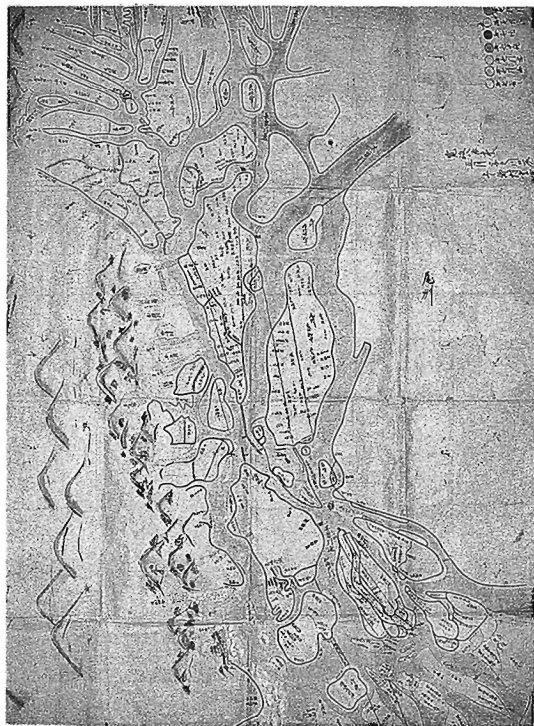


二 水とのたたかい

① 下笠輪中しもがさわじゅう

私たちが住んでいる西濃地方は、土地が低い上に大きな川がいくつもつながり合って網の目のように流れていました。土地が低く水につきやすい所では、村の周りを堤で囲って、水が入らないようにして田や家を守りました。ちょうど村々が堤の輪の中へ入ったように見えるので輪中と言いました。昔の笠郷は栗笠・船附・大野・下笠・上之郷の五つの村がぐるりと輪中堤防に取り囲まれた「下笠輪中」の中にありました。今でも輪中堤の面影がところどころに残っています。

下笠輪中は伊尾川より西では最も古い輪中で、三百八十年位前から形作られるようになりました。また下笠輪中は金草川、牧田川、伊尾川、津屋川に囲まれたひとまわり大きな輪中（多藝輪中）の中にも入っています。このように、大きな輪中の中に更に小さな輪中がふくまれたものを複合輪中といえます。昔の人の水とのたたかいや苦勞が偲ばれます。



▲ 200年位前に書かれた輪中の図
(学校にあります)

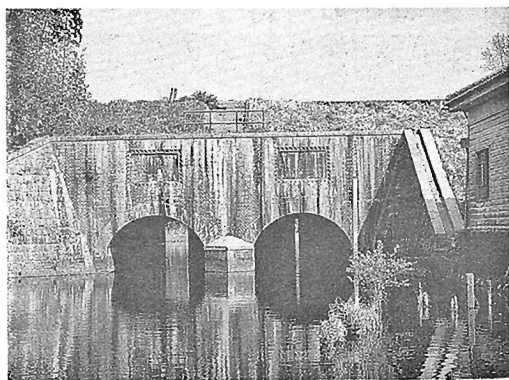
②

下笠輪中悪水落江と八通証文

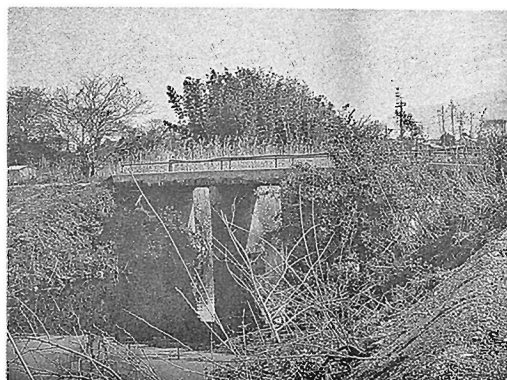
下笠輪中をとりまく金草川、牧田川、伊尾川は、川の方が田畑より高い所を流れる天井川なので、輪中の水は自然には川へ流れ出ることが出来ません。しかし輪中内では雨水や井戸水がたまって、稲や作物をくさらせる悪水となります。そこで西八間川と東八間川によって鼻が橋（細池の南）へ集められた悪水を流す川（悪水落江）を小坪まで作って、津屋川への自然排水を考えました。

寛文十一年（一六七一）下笠輪中の五つの村と、大場・根古地・根古地新田（瑞穂）の三つの村で、悪水落江（今の五三川）を作る工事を始めました。これは長さが二千六百間（四七〇〇メートル）もあり、人力にたよる当時では大変な工事でした。

この落江は関係のない村を通してもらうので、年貢（江代米）を納めました。また迷惑をかけないように川の藻を刈り取ったり、川底をきれいにする等の約束ごとを、役人の立合いの上で決めて証文に書き残しました。「下笠輪中悪水落定証文」ですが、八通あることから「八通証文」ともいわれ、養老町の文化財に指定されています。



▲ 五三落江の樋門（小坪）



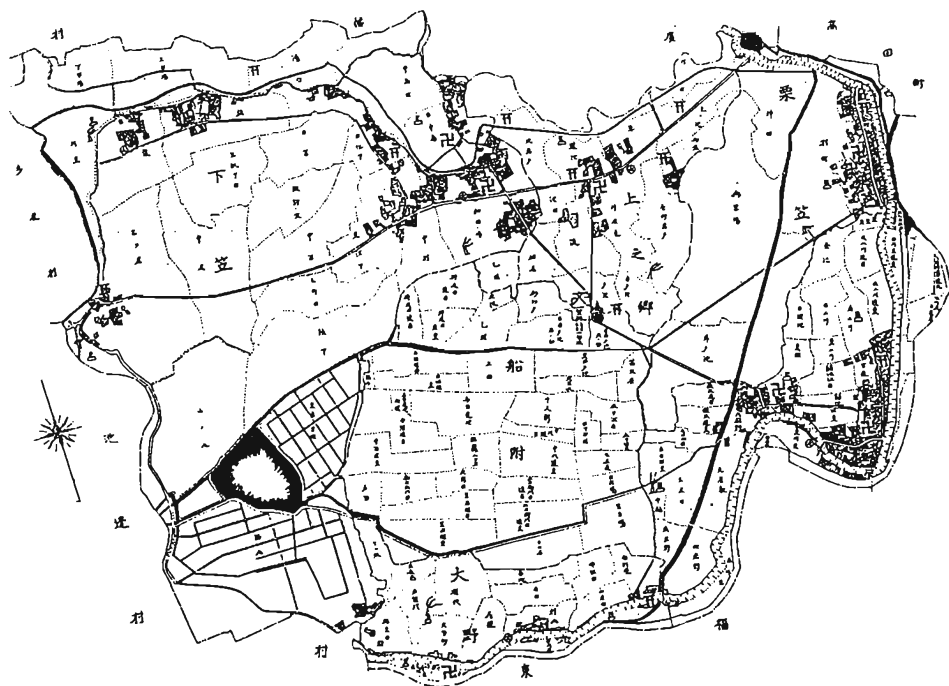
▲ 現在の鼻が橋
（通称はながし）

③

両江悪水落江と伏越樋

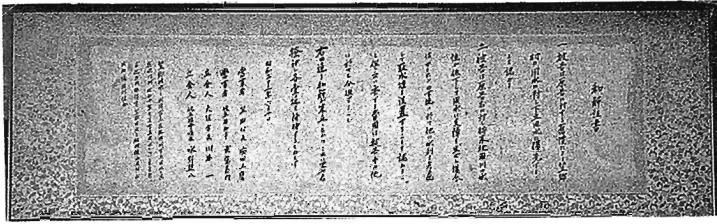
下の地図では、栗笠の南から上大野へかけて太い水路が見られます。これは隣の輪中が悪水を流す排水路で、江月輪中と烏江輪中の二つの江をとって、両江悪水落江（通称よげた）と呼ばれました。江月輪中では、周りを四つの天井川で囲まれているので排水ができず苦労しました。そこで元文五年（一七四〇）牧田川の川底を横断する伏越樋を作り、烏江輪中の落江へ落させてもらいました。烏江輪中では寛保年間（一七四一〜一七四四）に金草川を伏越して、栗笠から大野まで二三〇〇メートルの悪水落江を作って、伊尾川へ自然排水をする工事を行いました。

更に天明五年（一七八五）には、二つの輪中が共同で悪水落江を丈夫に築き直したり、落江を通してもらうための年貢（江代米）を、栗笠村・船附村・大野村に払うきまりを結んだりました。



▶ 昭和十四年頃の笠郷

▼ 自治会館にある和解証書



伏越樋とは、大きな川の底を掘り割って、桧や松の厚い板で四角い水筒（水の通り道）をうめこんだもので、機械のない当時としては、想像をこえる工事であったと思われます。昭和三十五年から始まった耕地整理で、両江悪水落江は無くなりましたが、金草川の扒樋は今でも下立用水の取り入れ口として使われています。

④ 「下立用水」と「笠郷用水」の行政訴訟

昭和一二年頃に、大垣市の下立用水の取り入れ口が杭瀬川に変更されました。当時笠郷村は牧田川から水を取っていましたが、流水が少ないため杭瀬川を水源としていたので、この変更は笠郷村五百町歩にとっては生死にかかわる問題でした。

そこで村長が書面で、上流の取水を制限して支障のないよう申し出て、県から回答をもらって安心していました。ところが昭和一九年のかんばつの時に、下流の横曽根用水が水を引けないので、船附用水に押しかけて両者の間で水争いとなりました。

昭和二一年一〇月、笠郷村は岐阜県知事を相手に、裁判所へ訴えることになりました。昭和二三年六月、調停により両者の間に和解（仲なおり）が成立して、①笠郷用水が下立用水に優先すること、②サイホンの下流に取水堰設置を認めることなどの証書がかわされました。

▼ 土蔵式水屋（船附）



⑤ 輪中生活の知恵

● 堀田

水はけの悪い輪中では、水田の一部を掘ってその土を高く盛り上げて堀田を作りました。耕地の三分の一位は掘つぶれて池となり、それが川のように続いている所もありました。田の土が堀へくずれ落ちないように、長じよれんを使って底にたまったどべをすくい上げて境目をぬり固めたり、田にまき散らすつらい作業もしました。

● 水屋

輪中に住む人々は何度も水害に苦しめられたので、生

活を守るためにいろいろと工夫しま

した。屋敷全体を一段と高く土盛り

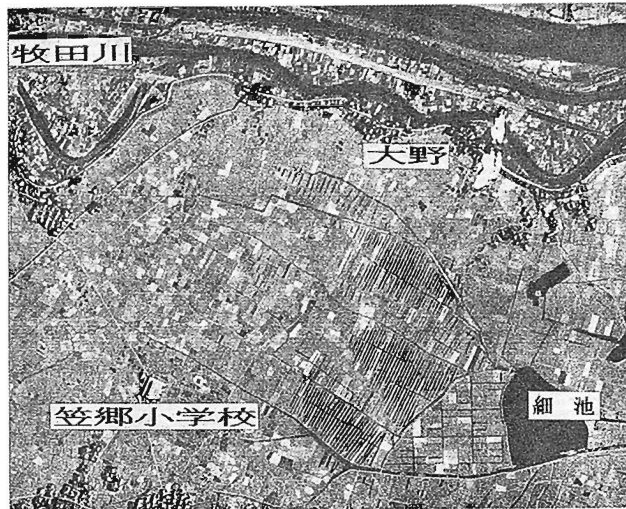
した「高屋敷」や、一か所だけ石垣を高く積み上げて、大水の時に避

難する「水屋」を作りました。水屋にはお米・味噌・つけ物・水など

を貯えておきました。少なくなりましたが、今でも校下のあちこちに

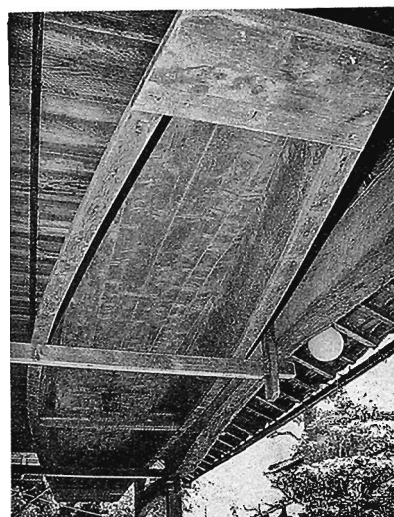
見ることが出来ます。また堤防上には洪水にそなえて、すぐ工事に使

える材料や道具を入れた、水防倉庫（郷倉）を建てました。



▲ 網の目のように広がる堀つぶれ
（線のように見える所）昭和22年撮影

● 上げ舟 (小野三男氏蔵)



上げ舟とは輪中地帯特有のもので、ふだんは軒下や小屋につり下げておき、大水の危険がせまると降ろして避難用を使う舟です。上の写真の上げ舟は、槇の木で作られた立派なもので、養老町の民俗文化財に指定されています。

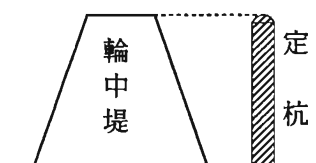
この舟は長さ六メートル、幅一・三メートルで十人位の人が乗れます。作られたのは明治時代と思われるですが、昭和三十四年八月十三日の集中豪雨による洪水で初めて使われました。このように、昔は自家用の舟が生活の知恵から生まれた、唯一の自衛手段でした。

● 上げ仏壇

大切なお仏壇を水害から守るために、天井がはずせるようになっていて、二階の天井に滑車をつけて、水入りの時に仏壇を二階へつり上げました。

● 水争いと定杭

隣どうしの輪中の人々の間で、輪中堤を高くする、しないとか、洪水の時に堤防を切る、切らせないで争い(水争い)がおこることがあります。このため堤の高さを決めて水争いを治める定杭を考えました。堤防の横に杭を立て、それ以上に高くも低くもしない約束をしました。



▲ 定杭のしくみ

⑥ 多かった洪水

新田の開発が進んで輪中が多く作られるようになると、水のたまり場が少なくなつて、当時の低い堤防では洪水を防ぐことが出来なくなり、しばしば被害を受けるようになりました。私たちの住んでいる所も、下の表からも分かるように、牧田川や伊尾川の堤防が切れて洪水で苦しみました。今も切れた堤防の上には水神様すいじんさまがおまつりしてある所もあります。

特に慶安三年（一六五〇）には、木曾・長良・伊尾の三つの大きな川が出水して、美濃地方は全部水につかつて、養老から岐阜まで船で行けたそうです。

また明治二十九年（一八九六）には二度も大洪水におそわれ、各地の堤防が至る所で切れて、伊勢湾まで一面の泥海となり、大垣城の高い石垣も水につかっしまいました。輪中の人々は農作物が何もとれないので、出かせぎに出たり移り住むなど、とても悲惨ひさんなありさまでした。

下笠輪中水害年表

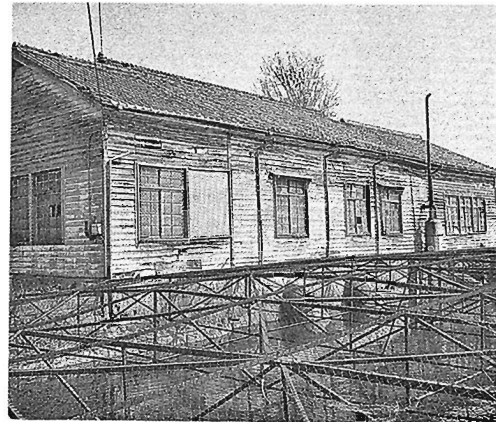
西暦	年 号	月 日	水 害
1566	永禄 9	10, 14	牧田川大洪水、このため河状が変わって南北二派となる
1586	天正14	8, 9	木曾川大洪水で河状が変わる 牧田川大出水、沿村各地を荒す
1650	慶安 3	9, 26	枝広の大水、岐阜・養老の間は舟で往来ができた
1655	明暦 1	7, 4	牧田川大出水
1687	貞亨 4	7, 14	洪水で福地神社の古文書流出
1701	元禄14	9, 19	14日から大雨で牧田川、津屋川、金草川沿いを破壊
1773	安永 2	6, 19	烏江湊より水が押し入る、下笠輪中も切れる
		7, 22	多芸村、蛇持村切入る。多芸輪中残らず水入り
		8, 10	大坪村、橋爪村切入る。多芸輪中残らず水入り
1789	寛政 1	7, 10	多芸輪中所々破堤
1798	寛政10	5, 15	この日より天空異常、暴風雨
		5, 22	木曾・長良・揖斐川他各河川氾濫 前代未聞となる
1815	文化12	8, 2	美濃の各川洪水で大被害
		8, 31	牧田川筋多芸村破堤
1860	万延 1	6, 29	木曾・長良・揖斐三川大洪水、船附村で牧田川切れ
1896	明治29	7, 20	豪雨で木曾・長良・揖斐川他各河川全て氾濫、決壊多数
1959	昭和34	8, 13	根古地で決壊し、多芸輪中水没
		9, 26	伊勢湾台風で根古地決壊口が再び決壊、また下笠輪中水没

⑦

二つの排水機場
はいすいきじょう



▲ 大野にある五三排水機場



▲ 小坪（大巻）にある笠郷排水機場

下笠輪中の水は、前に述べた五三落江により津屋川へ自然排水されていましたが、大雨が降ると排水が悪く、農作物も水につかってくさってしまうことがありました。そこで笠郷のために排水機場（水を流し出すポンプ）を作ろうということになりました。

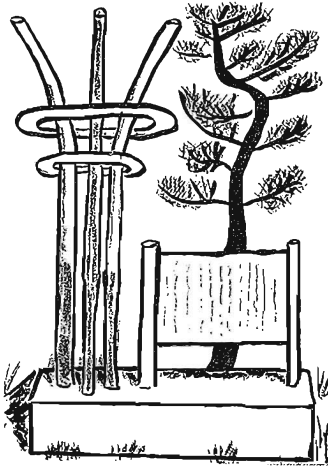
大正十二年、池辺村大巻の笠郷閘門の南に、イギリス製の百五十馬力の蒸気機関で動かすポンプ二台が取り付けられました。専門の人が二人ずつ交代で、泊まり込みで運転するなど苦労も多くなりました。後にジーゼルエンジンで動かすようになりましたが、ポンプは今も活やくしています。

伊勢湾台風後の耕地整理と、笠郷排水機を補う意味から、昭和四十四年には大野に写真のような立派な排水機場が完成しました。細池からの五三排水路も同時に作られました。ここでは五百五十馬力のモーター二台でポンプを動かして、田に水がかかるのを防いでいます。このように排水機にたずさわった人々のおかげで、今では被害も少なくなりました。

▼ 二度の水害の水位標柱

▼ 作文集
「災害永遠に忘れじ」より

⑧ 二度の大水害



ゴーゴーとものすごい風が吹いていつ家がふっとばされるかと心配しつつ、親子五人は恐ろしさのあまり一か所に固まってふるえていました。そのうちに雨もりが激しくなり、いる場所がなく私と兄ちゃんと弟と三人で押入れの中にもぐり込みました。母ちゃんと姉ちゃんは傘をさしていました。――中略――
ますます風雨は激しくなり、電灯は消えてろうそくの火をたよりに、今度の風で家が倒れるんじゃないかとブルブルふるえていました。少し風が静かになったので外に出てみたら、八月十三日に切れた根古地の堤防がまた切れそうだと聞いて、急いで家の中をかたづけにかかりました。朝三時半ごろ三百米ほどの所まで真っ白に波が押し寄せてきました。前の大水のときよりみずかさが多い。

――後略―― 五年 女子

「根古地の堤防が切れたぞー。」となるような叫び声。まさか堤

が切れるなんて考えたこともありません。昭和三十四年八月十三日午後八時頃、「水が来ても庭先ぐらいだろう。」と思って外へ出ると、白い大きな波が暗やみから押し寄せてくる。驚いて家の中へとび込むと同時に、雷が落ちたようにゴーゴーと音を立てて水が入ってきて、あつという間にひざまでつかって避難するのが精一杯でした、と当時を知る人が話されました。

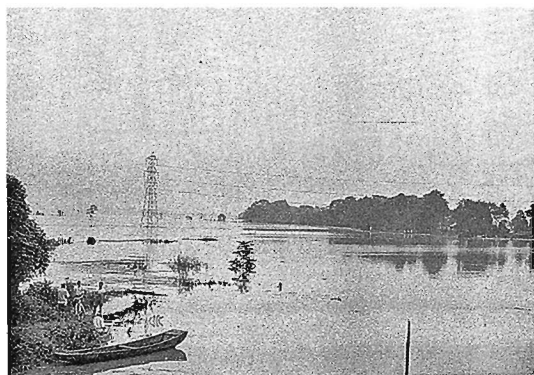
まれにみる集中豪雨で一夜のうちに泥海となり、家は屋根だけを残して湖に浮かんでいるようでした。それから一ヶ月近くも水につかっている所もあって、農作物は全滅の被害を受けました。子ども達は親戚へあずけられる子も多く、二学期は五十六人も欠席がありました。

その年の九月二十六日、この地方を伊勢湾台風が直撃しました。二十七日午前一時半頃、再び根古地で堤防が決壊して二度めの大水におそわれました。一階建ての当時の笠郷小学校も、完全に水につかってしまいました。この台風で名古屋を中心に大被害を受け、五千人も尊い命が失われました。

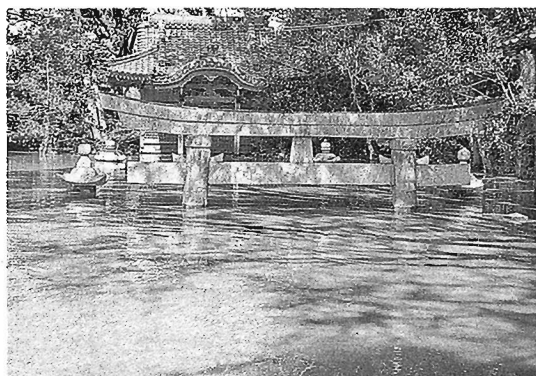
校下各地の災害状況



中島付近



下笠方面



三ッ屋八幡神社



栗笠の堤防より



学校も海の中



大野堤防上

⑨ 耕地整理と干拓 こうちせいり かんたく

昭和三十四年の二度にわたる大水害で、この地方の田畑には大量の土砂がたまってお米も作れない状態でした。そこで災害復旧と農業を守るために、救農土木事業という工事が行われることになりました。農家の人々はお米が作れないので、現金収入のために男の人はもちろん、お年寄りや女の人まで工事に出て働きました。

この工事は昭和三十五年から始まり、五年の月日と大きな費用をかけて行われました。今のような大型の機械がないので、人々はえんぴというスコップやつるはしで道を作り、水路を掘り、高い土地の泥を低い土地へトロツコで運びました。そして今のように、たて横のきちんと整った田圃にするために、暑い夏も寒い冬も休むことなく必死で働きました。

また堀つぶれという池を田圃にする、埋立干拓工事も行われました。細池に大きなサンドポンプ船を浮かべて、太いパイプで水と一緒に泥を運んで埋めたてました。このような苦労のおかげで、今日の広々とした美田が作られたのです。この二つの工事を記念して、自治会館前に石碑が建てられました。



▲ 記念碑（自治会館前）



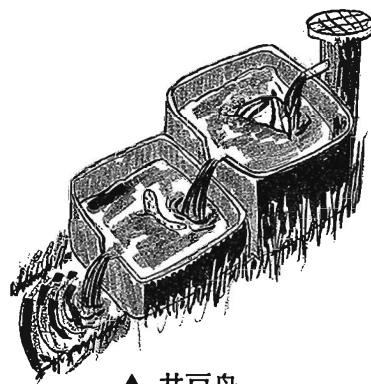
▲ 工事のようす（船附地内）

三

ふるさとの自然

① 自噴水^{じふんすい}

西濃地方一帯では、北や西の山のふもとから地中に入った水が、絶えず地下を流れているために、地下水は自噴水となって自然に地上に湧き出てきます。二百年位昔に井戸を掘る技術が考えられて、夏冷たく、冬暖かいきれいな水が年中豊富に湧き出てくる、全国でも有名な自噴水の地域となりました。どの家にも上・下に分かれた井戸舟（水槽）があり、上の水は炊事やくだ物を冷やすのに使い、下の水で食器や野菜を洗いました。



▲ 井戸舟

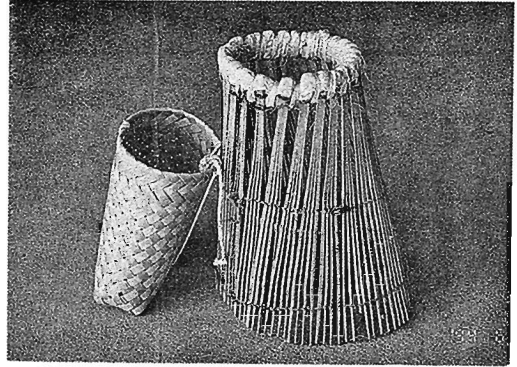
しかし、掘りぬき井戸から絶えず出てくる水がたまって作物をくさらせてしまうので、井戸の本数を制限しました。この制度を「株井戸制^{かぶいどせい}」といい、許しのない井戸は掘ることができませんでした。下笠輪中では井戸の所有者に鑑札^{かんさつ}（証明のふだ）が渡されました。

② 自然のめぐみ

春、五月頃になると田は一面に黄色い菜種^{なたね}の花、紫のれんげ^{むらさき}の花、そしてうす緑の麦^{むぎ}の穂^ほで一段と美しくなります。その頃、一度大雨が降ると田んぼは水びたしとなり、川からふな・こい・なまず・うなぎまでも田の浅い所へ集まってきます。

「今夜は良い水だし、暖かいから火ぶりに行こうか。」と父親にさそわれると、喜んで

▼ どっぺとうえつき



ガス灯のカーバイトを買いに走りました。魚は夜になるとじっとして動きません。明るいガス灯で照らすと水の中までよく見えるので、うえつきで押さえて手づかみにし、どっぺの中へ入れます。大きなものは六十センチ位もあり、隣近所へも配りました。

夏には細池にとびん貝（カラス貝）を取りに行きました。舟に乗って行き、土の中に半分かくれている貝を手や足ではさんで取ります。帰りには、一面に浮いているひしの実を取ってきて、家でゆでて食べました。栗の味がして、子ども達のおやつとなりました。

秋には川や池の水が少なくなるので、川の両端を板や土でせき止めて、中の水をバケツや水車でくみ出すかいどりをします。水がなくなるとこいやなまが顔を出すので、みんなで泥水の中へ入って網や手でつかまえます。焼き魚は、お祭りにはなくてはならない御馳走でした。また柿やいちじくなどの果物もよく実りましたが、子ども達は遊びながら、つまみ（桑の実）・ぐみ・野いちごなどもよく食べました。

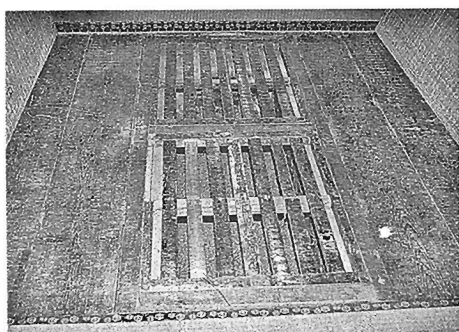
掘りつぶれ（池）の魚は冬は寒いので、かげでじっとしています。村人達は一斉にかきだも漁をしました。半円形の大きなたもに竿をつけたかきだも（前がき）を池へほり込んで、どべと一緒に魚やつば（たにし）をすくい上げるのです。このように一年中、自然のめぐみで生活し、レクリエーションにもなりました。そして貴重な栄養食品ともなりました。

③ さかんだった養蚕ようさん

船附や大野では、明治の始め頃から堤の外の広い土地を利用して、桑くわの木を育てて蚕かいこを飼うことが盛さかんになりました。特に大野では殆ほとんどの農家で養蚕が営いとなまれていましたが、唯一いつの現金収入でもありませんでしたから、お嫁入りされた人は大変苦労されました。

桑の葉をつむために、朝早くから牧田川を一人で舟をこいで渡るのがとても怖こわく、水が多いときには流されてしまったり、一枚ずつ手でつんで大籠かごにつめて持ち帰るなどの力仕事もありました。蚕を飼う部屋は住宅を使うので、家族の寝ねる所までも占領せんりようされました。部屋へやの床に暖炉だんろを作つて、松の木の幹みきを並べ、すき間に焼きぬかをつめて成虫になるまで暖房だんぽうしたので、煙や炭酸ガスで気持ちが悪くなることも度々たびたびでした。また蚕が病気になるまで時には飼っていた蚕を全部捨てたこともあったそうです。

薄い葉を細かく刻きざんだ上に蚕の卵を置き、鳥の羽根で掃はき落とす「はき立て」に始まり、三回皮を脱ぬいで四齡れいとなり、まゆになるまで全て手作業が続きました。この作業を春蚕はるこ・夏蚕なつこ・秋蚕あきこ・晩秋蚕ばんしゅうこと年四回飼う家もあり、寒い冬以外は農業と養蚕に忙しい日の連続でした。昭和三十四年の洪水による牧田川改修工事により、養蚕をする家も少なくなつて、今ではその面影おもかげも見られなくなりました。



▶ だんろ（大野）

④ 苦勞したお米作り

「今はお金はかかるが体は楽になったわ。ようあんなつらい仕事やとったと思う。昔は機械がなかったから、近所の人と助け合っては仕事をしたもんだよ。」近所に住むお年寄りに、お米作りの苦勞話を聞きました。

●田うち 米作りは田を掘りおこす田うちから始まる。重さ四キログラムもある大まんのう（三つぐわ）で土をくいだいた。朝うす暗いうちからの作業はとてもつらい。牛にからすきを引かせて土を細かくもした。この頃、なえば苗場（なわしろ苗代）を作ってたねもみをまいた。

●田植え 「父親に田んぼへ来いと言われて、学校から帰ると毎日走って行ったもんやった。」梅雨つゆに入る六月下旬けじゅんになると、いよいよ田植えである。村では相談して、同じ日に田へ水を入れた。牛に馬ぐわを引かせて、田の土を水でやわらかくして植えやすくした。

田植えは田の両端にわく枠を立て、ひもを張って横へ植えていったが、その後はうしろ下さがりの五本植えに変わってきた。

●田の草とり 田植えが終わると、草が生えないように田すりごまという草取り機を押したり、かきうちといって苗と苗の間を手でひっかく作業をした。

「田の草取りは七月の暑あつい盛さかりで、田んぼに足を入れるとお湯



▶ 昔のお百姓さん

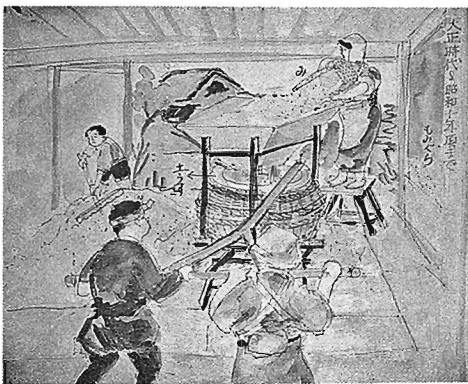
につかっているようやった。おとなも子どもも割当てがあつて、どんなに暑くても汗びっしょりになってよつんばいになって草取りをしたもんだよ。」

●稲刈り ^{いねか} 十月の終り頃から稲刈りが始まる。ひと株ずつのこぎりがまを使って稲刈りをした。田植えと同じように腰を曲げた作業で、時々腰を伸ばしながらのつらい仕事だった。刈った稲は、直径二メートル・高さ二・五メートル程にまるく積み上げたいなずみを作つて干した。

●脱こく ^{だっ} よく乾いた稲を脱こく（もみを取る）するのには大昔は千歯 ^{せんば} こきを使ったが、後に足踏み脱穀機 ^{だっこくき} に変わってきた。このモミをむしろの上で二三日 ^{てんび} 天日で乾かす ^{かわ} 干もみ ^{ほし} は子どもも手伝った。

●もみすり 秋から正月まで雨や雪が降ると、家の中でうす引きをした。これは泥で作つたうすでもみを引き、もみがらと玄米に分ける。昭和十年頃からは電気で動かすもみすり機を使うようになったので、作業も早く終わるようになった。

「私の家では人手が少なかったので、忙しい時は朝の三時に起きて田んぼの仕事をした。もみを干した時に雨が少しでも降ってくると走って帰ってきて、ぬらさんようにしたので大変やった。俵 ^{たわら} はもちろん自分で編んだよ。何もかも手作業、手作りやったな。」



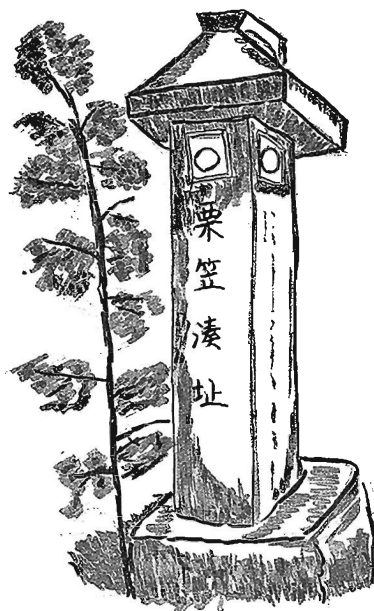
▶ とうろくすのもみすり

四

交通のいまむかし

①

濃州三湊と九里半街道
のつしゅうさんみなと



国道二五八号線にかかる養老大橋から、牧田川上流に向かつて烏江橋までのわずか二キロメートル余りの間に、船附・栗笠・烏江の三つの集落があります。これらの集落は、戦国時代の末期から江戸時代の末頃までの三百年の間、尾張藩の支援を受けて湊町（川のみなど）として栄え、濃州三湊と名づけられていました。

昔はトラックや鉄道がありませんから、荷物を運ぶには陸上よりも舟を利用した水上による方が、大量に運べて便利でした。そこで尾張（名古屋）や伊勢方面の荷物を、関西（京都や大阪）や北陸（福井や石川）へ一番早く、一番速く、一番安い運賃で運べる輸送路が考えられました。それは、荷物を伊勢湾から伊尾川をさかのぼり、牧田川との合流点に近い濃州三湊まで舟で運び、ここからは陸上を利用して琵琶湖の朝妻湊まで運んで、更に琵琶湖を舟で運ぶルートでした。

陸上のルートは次頁の図のように、三つの湊から牧田川を通じて関ヶ原へ出て、そこからは中山道を利用して番場を経て米原の朝妻湊に至るもので、距離がおよそ九里半（約三十八キロメートル）であることから、九里半街道と呼ばれていました。

たくさんの荷物を積んだ舟が行き来するようになる、船頭さんや荷物を調べる人、宿屋やさまざまなお店屋さん、舟を造ったり修理したりする大工さんなど多くの人々が集まって、三湊はとてものにぎわったということです。

現在げんざいは湊みなととして利用することはありませんが、堤防ていぼう沿いその家並けいみや景観けいかんは、かつて栄さかえた頃ころの面影おもかげが残のこっています。船附ふねづきの堤防ていぼうわきには立派りつぱな常夜燈じょうやとうが、また栗笠くりかさの福地神社ふくぢしんじには、船問屋ふなもんや・佐藤家さとうけが奉納ほうなした灯明とうみょうや狛犬こまいぬ等らが残のこされていて、当時たうじの繁栄はんえいぶりが偲しのばれます。



② 舟に乗ってお嫁入り^{よめ}

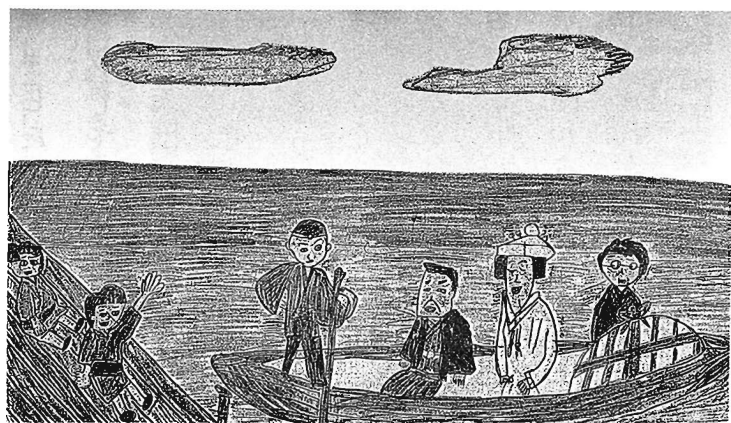
濃州三湊の一つである船附近くへのお嫁入りは、舟に乗ってやってきました。今のように自動車もなく、道も曲がりくねっていた時代のことで、伊尾川や牧田川をはじめ大小の川が各集落までつながっていたので、舟のほうが早くつきました。昭和のはじめ頃まではこのお嫁入りが見られたそうです。

白い角隠しをつけたお嫁さんと仲人さん、嫁入り荷物を乗せた小舟がギーギーと音を立てて揺れながら湊に着き、そこからは行列で村の中へやって来ます。すると子どもたちが大勢やってきて、「嫁さん嫁さん菓子^{かし}おくれ、菓子くれない通せんぼ」

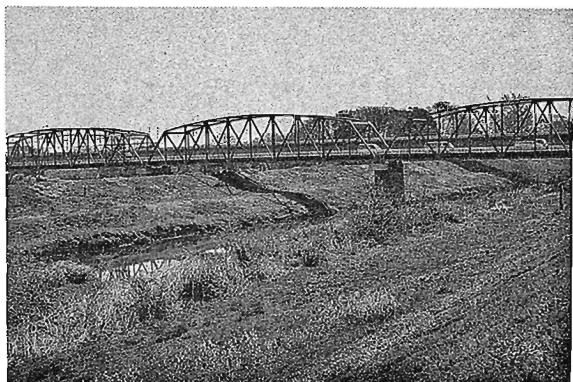
とはやし立てると、行列の人がお菓子をまきました。

お嫁入りの式は、おむこさんの家で行われました。近所はもちろんのこと、隣の村々から大人もお嫁さんを見に集まり、お菓子をもらって帰りました。当時の楽しい様子が想像されます。

その当時、船附には二軒の舟大工さんがいて、船を作っていました。そのほか二十人余りの船頭さんも住んでいました。また宿屋二軒、料理屋二軒、銭湯（お風呂やさん）、芝居小屋まであって、このあたりの中心地としてたいそうにぎわいました。



▼ この橋の西の方に渡し場があった



③ 横曽根渡しと横曽根橋

濃州三湊で栄えた船附・栗笠・烏江にはそれぞれ対岸へ渡るための「渡船場」がありました。船附も交通の要所としてお店も立ち並んで栄えていました。横曽根渡しは法覚寺の北あたりにあり、古文書（昔のことを記したもの）には、長さ約十メートルの渡し船が一艘あって十五人まで乗せたこと、牛や馬も渡したこと、風雨には特に気をつけることなど安全に心がけたことが記されています。

大正二年（一九一三）に、この渡し場に横曽根村が木製の橋を作りました。便利にはなりましたが、橋の西側に番小屋があつて、渡し賃の代わりに橋賃を徴収していました。船附の人は区費で一括で支払っていましたが、ほかの人は一銭・自転車は二銭・荷車は三銭を払って渡らせてもらいました。昔の牧田川は今より水が豊かで、この橋から飛びこんで水泳をしたそうです。

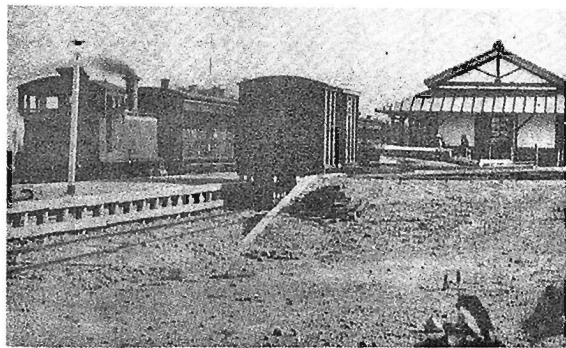
昭和二十八年の台風でこの橋は流されてしまったので、仮の橋が架けられました。昭和三十三年には当時の橋より約百メートル下流に、現在使われている永久橋に架けられました。更に昭和五十年には横曽根橋と並んで、国道二五八号線に養老大橋が架けられたので、とても便利になりました。

④ 近鉄養老線と国道二五八号線

今は自動車もめずらしくありませんが、ひと昔前までは自転車も貴重品^{きちようひん}で遠くまでも歩いていきました。しかし時間もかかって不便なことから、是非鉄道を作ってほしいという願いが高まって、明治四十四年に立川勇次郎^{たちかわゆうじろう}という人が、「養老鉄道株式会社^{かぶしきがいしゃ}」を作って工事を始めました。

大正二年には養老と大垣、大正八年には桑名^{くわな}と大垣が鉄道で結ばれました。当時は写真のような小さな蒸気機関車^{じょうきかんしゃ}（SL）が、二、三輛^{りゅう}の客車を引いてのんびり走っていました。長い煙突^{えんとつ}からもくもくと煙を出し、白い蒸気をふき出して走る姿に、見物にきた人は驚^{おどろ}きました。計画では船附を通る案もあったそうです。笠郷の人たちは烏江の駅を利用しましたが、大垣駅まで十三銭でした。大正十二年には電車にかわって大変便利になりました。

現在のように自動車の時代になる前は、笠郷地内では牧田川の堤防の上か、三ツ屋から栗笠へ抜^ぬける県道位しか車は通りませんでした。車の普及^{ふきゅう}と共に地内にも農免道路^{のうめん}（今の県道養老平田線）や、国道二五八号線も作られました。大垣を出て名神高速道路と立体交^{りったいこう}差^さし、船附^{ふね}を南へ進んで、南濃町や桑名と結んだ二五八号線は、昭和五十年に全通しました。大変便利になり、工場やお店も増えて活気に満ちてきました。



▲ 養老線のSL

五

教育のうつりかわり

① 寺子屋での勉強

江戸時代の一般庶民の教育は、寺子屋で行われていました。お寺で僧侶が近くの子どもを集め、おみ堂で教えたことから名づけられました。一般の人が自宅で教える場合もありました。そこへ通う子は寺子と呼ばれ、六歳から十五歳位の子が長くて六年、平均で三年位勉強しました。



▼ 寺子屋のようす

寺子屋の勉強は、読むことと書くことが中心でしたが、次第にそろばんも教えるようになりました。はじめは師匠（先生）が書いた手本を見ながら、一日中お習字をしました。簡単なことは兄弟子が師匠に代って教え、むつかしい内容になると師匠が個人指導をしました。授業中は席を離れる事は許されませんでした。毎月一日、十五日、二十五日の三日間と祭日がお休みでした。笠郷校下には下の表のように六つの寺子屋があり、中には遠くから習いにくる子もいました。授業料（お礼）は決まっておらず、わずかなお金か、田畑で取れた作物を持っていく程度でした。

幕末頃の寺子屋一覧表

（養老郡志による）

場所	教室	師匠名	科目	寺子数	区域
舟附	寺院	法覚寺	読書・習字	25	舟附
舟附	自宅	安田三郎右衛門	読書・習字	40	舟附・大野
栗笠	自宅	高橋千里	読書・習字・珠算	500	美濃・伊勢・尾張
上之郷	自宅	近藤基左衛門	習字・算盤	30	上之郷・下笠・岩道
下笠	寺院	浄雲寺	読書・習字	20	懐・和田
下笠	自宅	西脇金之助	読書・習字	50	下笠

②

明治になって、世の中のすべてが大きく変わり
ました。明治五年に今までの寺子屋とは違う学校
を作りなさい、という学制がくせいが公布こうふ（法律で決まっ
たことを知らせること）されました。それにした
がって、明治六年に今の笠郷小学校の前身ぜんしんである
四つの学校が作られました。

- | | | | |
|---|--------------------------------|---------------------------------|---------|
| ① | 立心第一学校
<small>りっしん</small> | (下笠村
<small>じやううんじ</small>) | 浄雲寺 |
| ② | 立心第三学校 | (大野村
<small>べつてい</small>) | 渋谷代衛氏別邸 |
| ③ | 勉旃義校
<small>べんせんぎこう</small> | (栗笠村) | 一民家 |
| ④ | 修文義校
<small>しゅうぶん</small> | (船附村) | 一寺院 |

学校とはいうものの、仮の校舎で運動場もあり
 ませんでした。新しい時代にふさわしい勉強が
 始められました。その後合併がっぺいしたり名前を変えた
 り、校舎を建てたりして次第に学校らしくなりま
 した。明治二十六年からは、下笠と船附の二つの
 学校となりました。

[illegible]

③

その後、学制改革かいかくなどで下の年表のように名前
 がかわりましたが、昭和二十九年の町村合併によ
 り、今の養老町立笠郷小学校となりました。

昭和三十一年には、赤い瓦かわらの校舎に建て替えられ運動場も広くなりました。しかし三年後の昭和三十四年には、集中豪雨こううと伊勢湾台風により、牧田川が切れて海のようになり、二度も水につかってしまいました。

1900				1905				1910				1915				1920				1925				1930				1935				1940							
平成				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和							
六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一				
養 老 町 立 笠 郷 小 学 校																												立 笠 郷 小 学 校				立 笠 郷 小 学 校				立 笠 郷 小 学 校			
一、F B C 大垣地区優秀賞を受賞する（三年連続） 二、創立五〇周年記念事業を行う（校歌制定・歌碑建立） 三、旧笠郷中学校屋内体育館が竣工する（現立郷小学校体育館） 四、東海三県図書館コンクール大垣地区優秀賞を受賞する 五、東海三県図書館コンクール教育奨励賞を受賞する 六、健康の碑を建立する 七、やりぬく子の碑を建立する 八、学校放送教育奨励賞を東海北陸地区放送研究協議会より受賞する 九、体育館を改造する 一〇、新校舎及び食堂棟の竣工式が行われる 一一、新運動場が完成する 目撃水池が完成する 一二、運動場体育器具庫・仲よしの丘・岩石園が完成する 一三、普通教室を増築する 一四、文部省指定道徳教育研究発表会を行う 一五、笠郷獅子舞クラブが発足する 一六、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 一七、プール更衣室等を改築する 廊下を改修する 一八、同育小屋が完成する 一九、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 二〇、学校給食で文部大臣表彰を受ける 二一、和太鼓の寄付を受ける 二二、町制四十周年記念・校歌碑を建立する																												一、高専科を廃止して中学校と分離し 立郷村立立郷小学校と改称する 二、校舎の一部を改築する 三、町村合併により養老町立立郷小学校と改称する 四、学校図書館コンクールに於て努力賞を受賞する 五、校舎を新築し 校地を拡張する 六、野口英世博士像建立する 創立四〇周年記念式典を行う 七、東海三県図書館コンクール大垣地区優秀賞を受賞する 八、完全給食が実施される				一、立郷小学校が竣工する 二、創立五〇周年記念事業を行う（校歌制定・歌碑建立） 三、旧笠郷中学校屋内体育館が竣工する（現立郷小学校体育館） 四、東海三県図書館コンクール大垣地区優秀賞を受賞する 五、東海三県図書館コンクール教育奨励賞を受賞する 六、健康の碑を建立する 七、やりぬく子の碑を建立する 八、学校放送教育奨励賞を東海北陸地区放送研究協議会より受賞する 九、体育館を改造する 一〇、新校舎及び食堂棟の竣工式が行われる 一一、新運動場が完成する 目撃水池が完成する 一二、運動場体育器具庫・仲よしの丘・岩石園が完成する 一三、普通教室を増築する 一四、文部省指定道徳教育研究発表会を行う 一五、笠郷獅子舞クラブが発足する 一六、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 一七、プール更衣室等を改築する 廊下を改修する 一八、同育小屋が完成する 一九、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 二〇、学校給食で文部大臣表彰を受ける 二一、和太鼓の寄付を受ける 二二、町制四十周年記念・校歌碑を建立する				一、立郷小学校が竣工する 二、創立五〇周年記念事業を行う（校歌制定・歌碑建立） 三、旧笠郷中学校屋内体育館が竣工する（現立郷小学校体育館） 四、東海三県図書館コンクール大垣地区優秀賞を受賞する 五、東海三県図書館コンクール教育奨励賞を受賞する 六、健康の碑を建立する 七、やりぬく子の碑を建立する 八、学校放送教育奨励賞を東海北陸地区放送研究協議会より受賞する 九、体育館を改造する 一〇、新校舎及び食堂棟の竣工式が行われる 一一、新運動場が完成する 目撃水池が完成する 一二、運動場体育器具庫・仲よしの丘・岩石園が完成する 一三、普通教室を増築する 一四、文部省指定道徳教育研究発表会を行う 一五、笠郷獅子舞クラブが発足する 一六、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 一七、プール更衣室等を改築する 廊下を改修する 一八、同育小屋が完成する 一九、町教育委員会指定 オープン教育研究発表会を行う 二〇、学校給食で文部大臣表彰を受ける 二一、和太鼓の寄付を受ける 二二、町制四十周年記念・校歌碑を建立する			

④ オープンスペースのある学校

二度にわたる水害の被害を受けた木造の校舎はいたみもひどくなり、鉄筋三階建の校舎に建て替えられることになりました。新しく建てるなら近代的なすばらしい学校にしよう
と、地域の人々の願いや協力により、昭和六十一年に現在の校舎が落成しました。オープンスペースや食堂棟もある立派な学校に生まれかわりました。

オープンスペースとは、教室の横にある多目的に使える広いスペースのことで、移動できる壁を活用したり、学習コーナーを作ったりして多様な学習を展開することが出来ます。その後、運動場の拡張・教室の増築・プールの改築などをして機能も充実してきました。



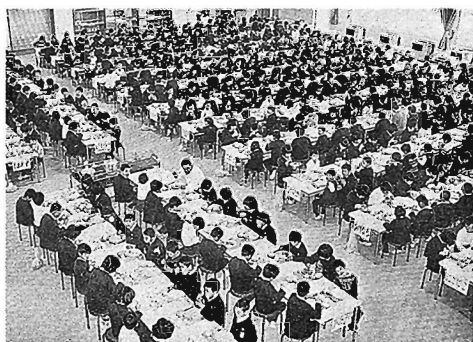
▶ 竣工式の様子



◀ オープンスペース

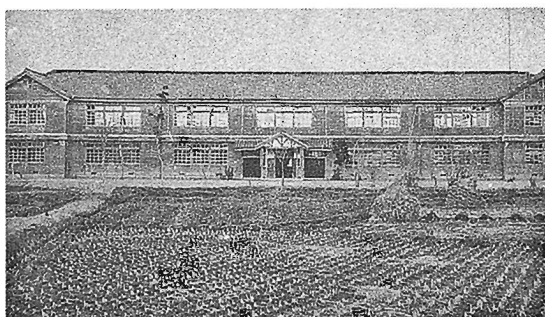


▶ 中庭

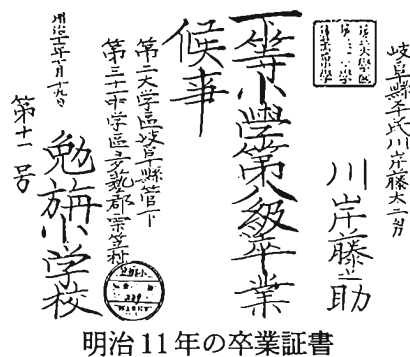


◀ 食堂棟

⑤ 笠郷小学校いまむかし



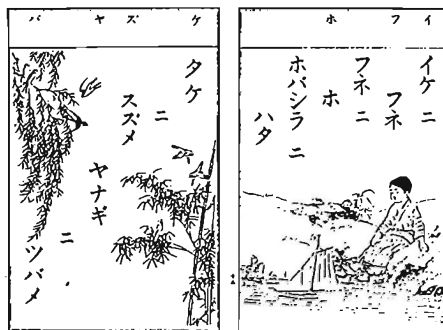
初代の校舎（大正9年建築）



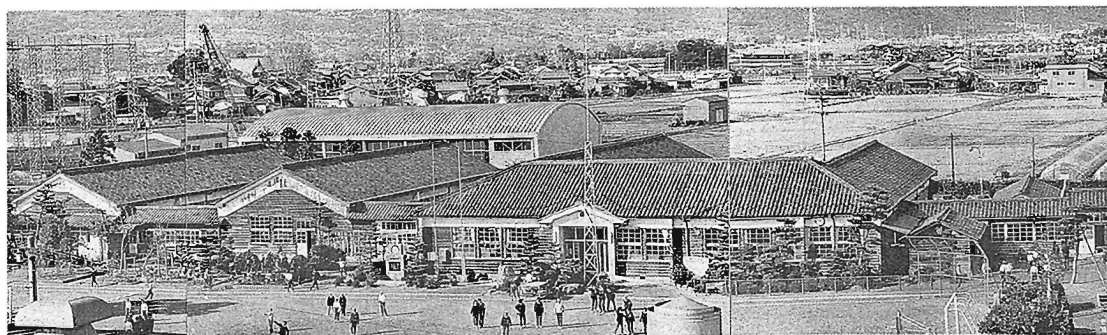
明治11年の卒業証書



当時の授業風景



尋常小学校読本 巻一
（明治42年）



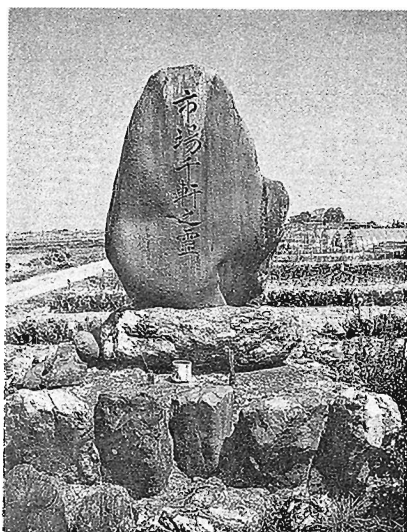
赤い屋根の旧校舎（昭和31年建築）



獅子舞クラブNHKに出演（平成3年）



校歌碑（平成6年建立）



六

史跡・文化財

①

市場千軒

笠郷校下の南西部懐の集落より西へ少し行った田圃の中に、「市場千軒之靈」と書かれた石碑があります。裏には八百年位前、大跡新田の東から下笠にかけて、市場千軒という集落があつて、家も沢山あり市場も繁盛してたと記されています。

栗笠の東はずれに今も市神社がありますが、享保十七年（一七三二）からこのあたりで、六斎市という市が毎月六回開かれていました。市場千軒はそれよりもずっと昔のことです。津屋川の下流から下池に入り、この地へ通ずる船路（川）によって品物が集められたことでしょうが、くわしいことは分かりません。養老町から根古地や今尾を結ぶ、津島街道に沿っていったことが、栄えた理由であつたと思われます。

しかし、元龜年間（一五七〇〜七二）に織田信長が天下を統一する戦いで火事にあい、市場千軒の集落は殆ど灰になつてしまつたと伝えられています。人々は他の土地へ移つてしまつて今では名前だけになっていますが、下笠には今でも上市場・下市場という小字名が残されています。昭和二十七年に、先祖の霊をなぐさめ昔のことを偲び伝えるために、構と懐の人たちが相談してこの碑を建てました。

②

下笠代官所址

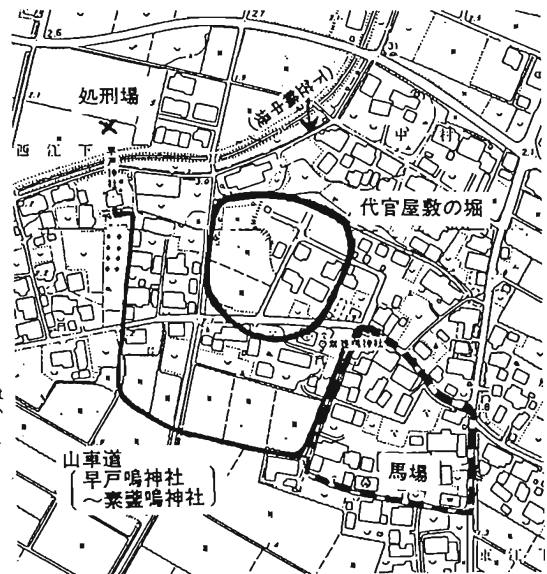
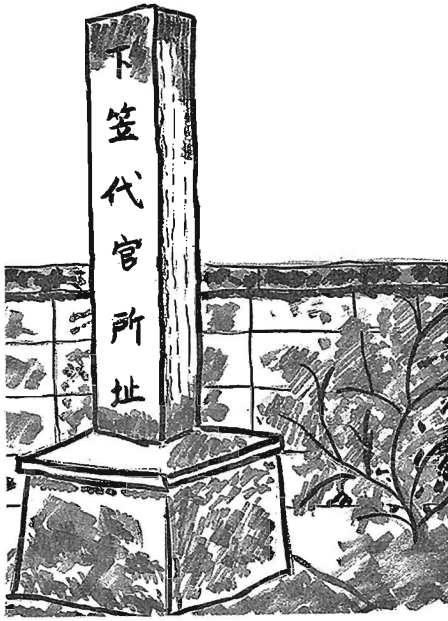
下笠の早戸神社から少し東へ行った所に、絵のうな石碑が建っています。代官所とは陣屋とも言い、徳川幕府のお役人の屋敷です。幕府の領地を支配して年貢（今の税金）を集めたり、悪いことをしないように取りしまったりしていました。

ここに代官所が置かれたのは元和元年（一六一五）で、今から三百八十年位昔のことです。お代官様は代々石原清左衛門を名のり、元禄十二年（一六九九）までの八十四年間村々を支配しました。四代目まで続きましたが、代官所が廃止になった

ので四日市の代官所へ移りました。

代官所は周囲が堀で囲まれていて、東江下のまわりの道は馬場（馬に乗る練習をする所）として使われていました。また早戸神社の裏の田の中には処刑場（罪人の首を切る所）もあり、処刑された人々をなぐさめる五輪塔も最近まで残されていました。

代官の石原家は下笠地区で新田を開発したので、家来の百姓（家中組といった）も多く住んでいました。



▲ 代官所の位置図

③ 郷土の無形文化財

● 栗笠の獅子舞

獅子舞は昔から日本のあちこちで見られ、親しまれてきた伝統芸能の一つですが、最近
は数も減へってきました。栗笠には今も獅子舞が受けつがれていて、お祭りには福地神社に
奉納ほうのうされます。

栗笠は濃州三湊のうしゅう みなとの一つとして栄えた所であり、また享保十七年（一七三二）からは六
斎市さいいちが開かれてとても栄えていましたから、このころから獅子舞も盛んになったものと思
われます。昭和四十五年に県の無形文化財むけいぶんかざいに指定されました。

この獅子舞の特徴は、同じ動作を三回ずつ繰り返す三段獅子で、
伊勢神楽いせぐまらの流れをくんだものです。湊の船頭さん達が遠く伊勢や
尾張へ出かけて、見たり聞いたりしてきたものを取り入れたり、
身の軽い舟乗りであることから曲芸きょげい的な要素も多く、四十八種目
にも及ぶ民俗芸能です。中でも「本乱ほんらん」という舞だけが神様に奉
納されて、すべての舞の基本となっています。

平成二年にはふるさと学習のひとつとして、笠小獅子舞クラブ
が作られ、地元の人の協力を得て練習が始まりました。現在男女
四一名のクラブ員が「大廻り」「鈴の舞」「三本剣」の舞と、笛や
太鼓のお囃子はやしの練習はげに励んでいます。



● 船附民謡

昔の船附村は湊の発展と共に栄え、八幡神社のお祭りも盛大に行われました。境内には高さ四メートル余の大きな櫓やぐらが丸太で組まれて、各字あざの自慢の太鼓が据すえられます。櫓を廻まわって「でんがらかし踊り」「白川踊り」「どじよう踊り」の順で、夜中まで踊り続けます。どじよう踊りは伊勢音頭いせおんどに合わせて踊ります。

● 下笠打ちはやし

早戸神社の例祭十月五日の夕方を過ぎると、昔から決められた道を通って、各字から屋根のある台車に乗せられた大太鼓が神社に向って出発します。鳥居前に集合すると行列を作って拝殿前はいでんに勢揃せいぞろいし、笛に合わせてにぎやかに打ちはやしが行われます。

● 栗笠祭踊り

船附と同じく湊で栄えた栗笠のお祭りには、二百数十年の伝統でんどうを持つ祭踊りが行われます。高さ三メートル近い大提灯ちようちんやきりこ灯籠とうろうも掲かげられ、大太鼓の櫓を巡めぐって船附同様に三種類の踊りが繰りひろげられます。踊りは夜半過ぎまで続けられ、最後はどじよう踊りでしめくくりとなります。

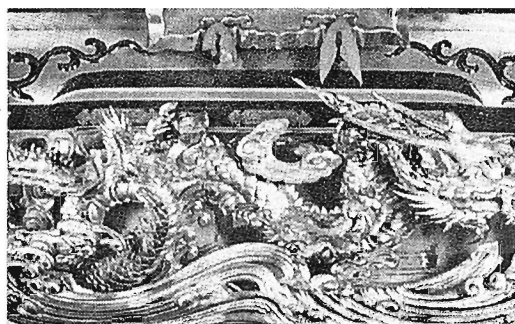


▲ 東江下のあんどんちぎり



▲ 下笠の打ちはやし

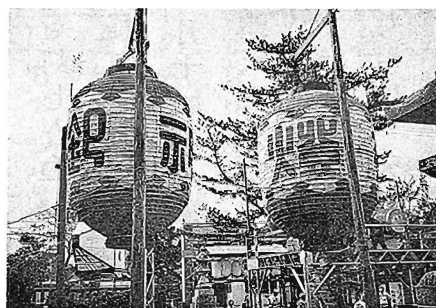
④ その他の文化財



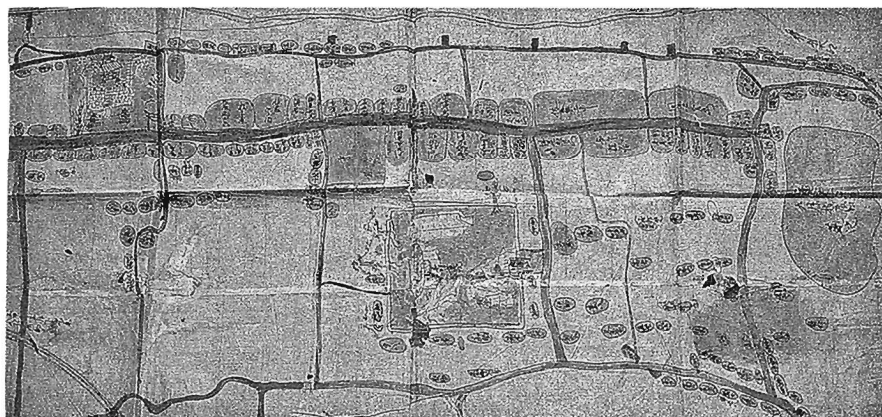
▲ 狭間（彫忠作・浄誓寺蔵）



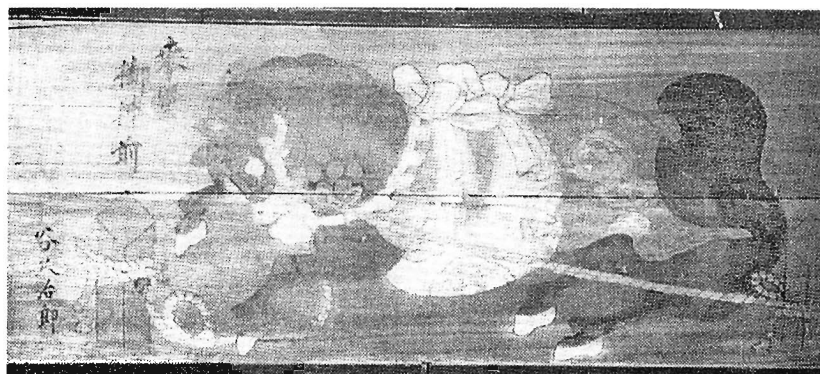
▲ 十三尊仏図
（栗田 保氏蔵）



◀ 福地神社祭堤灯
（福地神社蔵）



◀ 栗笠村絵図
（専了寺蔵）



◀ 絵馬・神馬図
（船附八幡神社蔵）

⑤ 小さなお祭り（年中行事）

● 左義長 さぎちやう 毎年一月十四日、神社等でわら・しば・竹を集めて大きな束たばを作ってどんと焼きが行われます。書き初めはつめを燃やした灰が高くまい上がると字が上手になると

か、この火で焼いたお餅を食べると病氣にならないともいわれています。

● 伊勢講 いせこう お正月すぎに伊勢神宮へ代表の人がお参りして、お札ふだを頂いてくるものです。

昔は歩いたり舟に乗ったりして何日もかかりましたが、今では電車や車を使います。このほか秋葉講あきはこうや稲荷講いなりこうの行われる地区もあります。

● 提灯ちぎり ちようちん 七月十六日の夕方、栗笠の市神神社と須賀神社の前で提灯ちぎりがあります。

ろうそくを灯ともした白い提灯を十二個ずつつけた四本の青竹を、それぞれ二本ずつ倒して提灯をちぎり合うもので、豊作を願う行事といわれています。

● かき行灯 かきあんどん 旧暦きゆうれきの六月十四日、東江下の素戔鳴神社で恒例のかき行灯かきあんどんの行事があります。

津島つしまの牛頭天王こうずてんのうをまつるお祭りで、きれいな絵が描かかれた行灯あんどんにろうそくが灯ともされる頃にぎわいます。やがて下に降ろされると一斉にうばい合います。

● 秋葉様祭 あきはさままつり あちらこちらに、火の神様である秋葉神社がありますが、船附には七か所もあり

ます。十月十七日と一月十五日に、幟のぼりや提灯かざりを飾かざってお祭りをします。

● 報恩講 ほうおんこう 親鸞聖人しんらんしょうにんの恩に報むくいるため、お寺で行われる法要ほうようのことで多くは年末・年始につとめられます。お寺と門徒もんどうが一体となって行われる大きな年中行事です。

⑥

粥占

笠郷校下には、一月十五日を中心にして、大釜で小豆粥を炊いて、竹の管の中へ入ったお粥の量でその年の豊作を占う、粥占の神事が行なわれる神社があります。神社により方法は少しずつ違いますが、ここでは三ツ屋の八幡神社の粥占を紹介します。

前日の九時より拝殿前に小屋掛けをしたり、竹の管を作ったりして準備をします。竹の管は「お管削り」と言い、三寸八分（約十一センチ）に切った女竹を小刀で皮一枚になるまで削ります。削った管十九本を麻のひもでつなぎます。大釜にお米一升と小豆一合とお管を入れ、夜の十時頃からゆっくりと炊き始めます。

十五日の朝七時、お管を静かに上げて三方という台に乗せて神前にお供します。さめた頃にお管を二つに開いて、中に入ったお粥の量を調べます。一番が麻、二番が大麦と順番に従って十八種類の作物を占います。平成六年は下の表のように、「やや良い」ということでした。太鼓の合図で、家々からお粥をもらいに集まります。このお粥をみんなで戴きますと、一年間病気にかからないともいわれています。



▲ 粥占の釜

平成六年

あさ	七分	きわた	二分
大麦	八分	早生	五分
小麦	九分	中生	六分
なたね	六分	晩生	九分
大豆	七分	あわ	五分
小豆	七分	きび	九分
ひえ	七分	えい	九分
とうもろこし	八分	ごま	八分
いも	九分	そば	八分

総札 八分

三ツ屋八幡神社

▲ 平成6年のお管記

⑦ 芭蕉句碑

船附の寺屋敷に、浄土宗のこじんまりとしたお寺「生蓮寺」があります。正徳元年（一七一）に作られましたから、他のお寺と比べると比較的新しい創建です。

その境内に有名な松尾芭蕉（江戸時代の俳人）の句碑（俳句を刻んだ石碑）がひっそりと建っています。高さ七十センチメートル程の自然石に、

『今日ばかり 人も年寄れ 初時雨』

冬の始め、初時雨が降り出した。日一日と厳しい冬に向かおうとしているが、人間はいつ迄も若くない。今日ばかりはお年寄りの気持ちになって、人生について考えてみようではないか。

と刻まれていて、明治三六年三月建立となっていますが、最近再発見されたものです。

当時、船附には谷さんという人を中心に俳句の好きな人が沢山みえて、俳句を作ったり研究されるなど活やくされていました。またお寺には「芭蕉翁」と書かれた、高さ四十六センチメートルの立派な位牌も祀られています。



▲ 芭蕉句碑

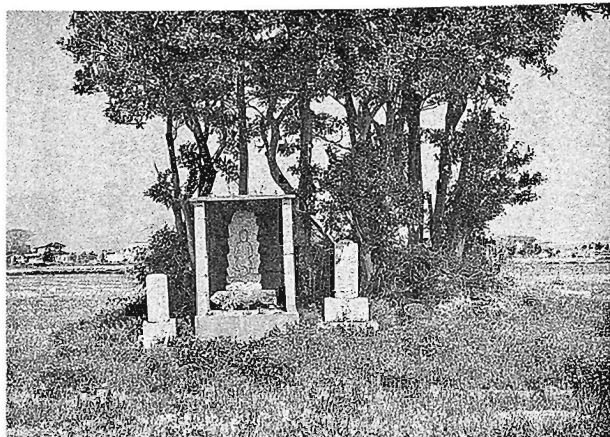
七

笠郷の昔話

①

中村塚の話

▼ 中村塚



鎌倉・室町時代といわれた大昔、室町幕府に赤松氏という大名がいました。特に赤松則村という武士の大將は、元弘の乱（一二三三）という戦いで活やくしました。その後いろいろな戦いの末、赤松氏は負けそうになりました。その時、義資という名前の十一歳の子が中村氏という家来に助けられて、内緒で中村彦三郎と名のって育てられていました。

関ヶ原合戦（一六〇〇）以降に、中村氏の子孫は今の養老町嶋田という所に隠れて住んでいましたが、義高という人の時代に笠郷の上之郷へ移ってきました。それから代々三百年以上にわたって栄えてきました。現在の子孫は、もとの赤松の名字にもどって

神戸市などに住んでおられますが、最近まで上之郷へお墓参りに来られていたそうです。

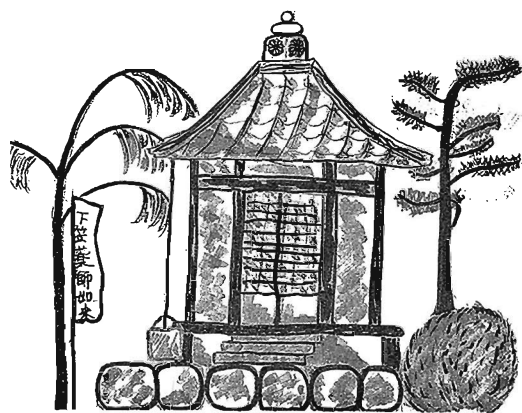
右の写真がそのお墓で「中村塚」と言われ、上之郷の北東の田圃の中にひっそりと建っています。その塚には刀や鎧が埋められていると伝えられていて、墓地を掘ったり、木を切ったりするとあたりがあるといわれています。上之郷の願専寺は中村家をお守りしていて、今でも赤松則村をはじめ、代々の位牌（亡くなった人の法名を記してあるもの）が安置されています。

② 帰ってきた薬師如来やくしにょらい

下笠の構と西江下の間に絵にあるようなお堂があり、中に下笠薬師という高さ七十センチメートルほどの仏様がまつられています。薬師如来とは、病気を治したり災難さいなんを救う仏様で、次のような話が伝わっています。

下笠の薬師如来は、ある年の大洪水で水に流されてしまったんじゃ。それから何年も月日が流れるうちに、はるか遠く離れた知多半島の大野海岸という所に、下笠の仏様とよく似ている「浜薬師」はまやくしがまつられておってな、ついこの間まで「下笠薬師如来」と呼ばれていたんじゃと。不思議なことじゃ。そこで信心深い下笠の人々が、「下笠薬師をお返しくださいらんかのお。」と、お願いしたそうな。知多のお寺でも、東向きに置いてある仏様が夜のうちに西の方（下笠の方向）を向かれていたということで、下笠へ返されることになり、まずはめでたしめでたしということじゃな。

けれど、実際にお帰りになった仏様はもとの仏様より少し小さいもので、身代りとしてお帰りになったんじゃと。知多のお寺に伝えられている由来ゆらいでは、今から六百五十年以上も昔、海岸に浮かび上がったと書かれておってな。はるか昔のことやが、それが縁で今でも知多と下笠の仏様は近うちこしとるんやと。ええのお。



③

住み良かったんじゃない。これがよう村人と出くわすんやそうな。

続きの道の川より、子供を背負った女の人が、月を背にじっと立っておった。わしの知



物の柄まで覚えておるのにな。おかしいのお。

局、狸にばかされたということで、けりがついたんや。

④ 魔池まいけに住む大蛇だいじゃ

昔、そう何百年も前のことらしいが、下池の手前に魔池という恐ろしい名前の池があつてな、名前を聞いただけでも、ちぢみ上がってしまう。その池はとても深くてな、ながーい竹でつついても底に当たらへん。みんなは底無し沼ぬまともいうとった。その魔池のすぐ横に、大きな松の木がいくつも横たわっておったそうな。

それがな、ある日村人が「どっこいしょ。」とまたぐと、松の木は大蛇になつてしまふんやと。それからというものの村中が大きな蛇になつて、村のもんは誰も近づかなくなつてしまった。けれど、子どもらは違ちがうとった。怖いもの見たさや、その大蛇を退治たいじしようと、ど

の子も目を輝かがやかせていたんやと。

とうとうある日の夕方、子どもらは魔池を目ざしてしまふたんじゃ。親にもないしよでな。先頭を歩いていたしょうやんが「おー。あつたあつた。大きな松の木だあー。」の声に、女の子は泣き出すし、小便しょうべんちびるもんもおった。みんな逃げだして、結局けっきょくしょうやんだけが残されてしまった。しょうやんは考えよつた。ここで引き下がっては、おとうにどやしつけられるだけ、退治すれば村中の者にほめられるしな。しょうやんは思いきつて松



の木をまたいだそうなの。

すると、急にあたりは暗くなり、松の木がゴソゴソし始めたと思ったら、「うおっー。」とそれはそれは恐ろしいうめき声が聞こえてきたんじや。その魔池のなかに顔をつっ込んでいた大蛇が、しょうやん目ざして向かってきよった。しょうやんは、あまりの恐ろしさに尻もちをついて動けんくなってしまうた。大蛇は、しょうやんをあつという間にくわえこんでしまつて、しょうやんはどうすることもできんかった。そのまま大蛇と一緒に池の中へ沈んでいったんじや。

それからというもんは、村ではしょうやんがもどつてこんで、そうさく隊も出したんじやが、見つかるわけはないわな。魔池の底におるんやもんな。

⑤ 上之郷のじよりぬぎ場

昔々、江戸時代の終わりまで、上之郷は天領（幕府が直接おさめる領地）だったので、各地から大名が多くござらしたんじや。どの大名も神社にお参りをしたいということで、道中の無事を一生けんめいお祈りしたんやと。それはそれは熱心に、お願いやお礼をいうとつたそうなの。そんで上之郷には、七つも神社があつたんやと。

そんな中でも、隼人神社・白山神社・御鋤神社の前には、じよりぬぎ場というもんがあつたんやと。はいていた草履をそこでぬいで、素足でお参りをするやそうなの。えろう神社いうもんを大切にしとつたんやな。今でもこのじよりぬぎ場の跡があるで、見とくとええがな。きつとその頃の事を思いえがけると思うで。



⑥ 人間になりたかったしらさぎ

ひと昔、いやいやもつと昔の話じゃが、大野の堤防に女の幽霊ゆうれいが出るというんじや。ずつと昔からよくあった話で、実はこの幽霊はしらさぎの化身けしん（人間のすがた）やそうな。昔々、青々とした田んぼに白い鳥が一羽、餌えさを求めておった。そこへ、村人のたくぼんが田んぼの水加減かげんを見に寄よったんじや。そしたらこの白い鳥はすっかりたくぼんを気に入ってしまった、たくぼんの後について歩いとったんやと。

そんなある日、たくぼんの家に嫁御よめごが来たんじや。かわいらしい嫁御じゃったが、たくぼんにいつもくっついてる白い鳥をにくらしく思ったんじやな。よういじめとったわ。そんな白い鳥を可哀想かわいそうに思ったたくぼんは、いつもかばってやとったわ。すると、嫁御はもつと腹をたてて、とうとう白い鳥を殺ころしてしもうたそうな。

それからしばらくして、白い着物を着た娘御むすめごが、たくぼんを尋ねて来るようになったと。それが、「私も人間やったらなあ。」と声をかけてくるんじや。たくぼんは、これには気

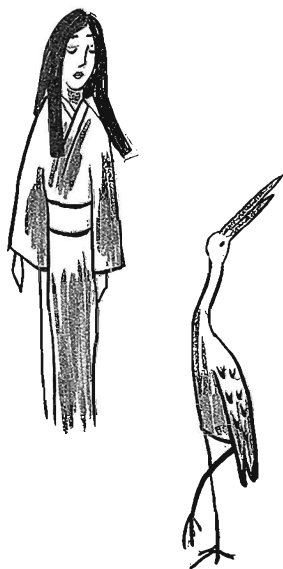
味悪がつて顔を合わさんようにしとったんや。そのう

ちあきらめるやろうとたかをくくっておったが、この

娘御、全然年を取らんのや。ぞくつとするのお。そん

なことであくぼんもこの世の人でなくなつたんじやが、

それでも娘御はまだ捜さがしとるんやと。



⑦ マグニチュード 八・四

「助けてくれー、動けん！ 苦しい！」

ものすごい音とともに大地がゆれ動き、家がこわれて柱が倒れ、はりが落ちてきました。くずれた壁や瓦の中からももうとうと土煙が上がり、あちこちで泣き叫ぶ声が聞こえて、まるで地獄のようなありさまとなりました。堤防はくずれて、橋も落ちてしまいました。明治二四年十月二八日、午前六時三十七分のことです。毎年のように水害で悩まされているこの地方に、マグニチュード八・四というものすごい大地震がおそいました。死者七二十七人、二十二万の家が壊れた濃尾大震災です。

笠郷校下でも下の表のように、八八八戸のほとんどが被害を受けました。また五十五人も村人が死亡して、百五十三人が重軽傷を負いました。養老町の中でも地盤がやわらかく、川ぞいの栗笠、船附、大野は特に大きな被害を受けました。しかしその時の怖さを知っている人も、親から聞いた人もいなくなっていました。

この地震の中心となる所は、揖斐川の上流で本巢郡根尾村です。その村の水鳥という所には、一瞬のうちに上下六メートル、左右四メートル長さ八十キロメートルに及ぶ大きな地面のずれ（断層）が出来てしまいました。世界的にも珍しく、特別史蹟になっています。

村別震災被害一覧表

(養老郡志より)

		舟 着 (大野含)	栗 笠	上之郷	下 笠	計
総人口		1 8 1 3	8 4 5	2 9 6	1 6 6 3	4 6 1 7
死亡者		2 5	1 9	7	4	5 5
負傷者	重傷	2 8	1 6	3	8	5 5
	軽傷	3 8	1 8	8	3 4	9 8
総戸数		3 5 6	1 7 6	4 9	3 0 7	8 8 8
家屋全潰		2 5 1	1 3 6	4 0	2 3 3	6 6 0
家屋半潰		1 0 5	3 8	8	7 1	2 2 2

郡内死亡者総数 1 0 9 人 郡内家屋全潰総数 1, 6 6 6 戸

⑧ 虫送り

デーンデーン デンガンガン

デンデンガンガン デンガンガン

太鼓と半鐘はんしやうが同時に鳴らされると、「送らよー送らよー」と若者らがはやしなから、松明たいまつを回して行進する虫送りです。いもち送りとはいわれ、稲いねの害虫を村の外へ追い払うための年中行事です。田植えのあと田の草取りの終るまでの間に、虫の発生のようなすを見て行いました。

昔はわらで人形さねしり（実盛さん）や虫を作って青竹の先につけました。実盛さんは源義仲と戦った時に稲につまづいて殺され、稲の虫になってしまったと伝えられています。のどかな風物詩の一つでしたが、太平洋戦争後からは行われなくなりました。

⑨ 腹太鼓（もぐらたたき）



「九月節せつくの腹太鼓、朝はぼた餅もち、昼強飯こわい、夜はうどんで身がもたん。」パーンパーンパーン夕方になると子ども達がわいわいさわぎながら、わら束たばにわら縄なわをぐるぐる巻きつけて作ったバットのようなものを持ち、村々の家を回って地面をたたきます。

これは腹太鼓といって、野ねずみやもぐらを音でおどして、来年の豊作ほうさくを願う意味の年中行事でした。回った家ではお菓子やお餅、時にはお小遣いこづかがもらえたので、昔の子どもたちには楽しみの一つでしたが、いつの頃からか行われなくなりました。

八

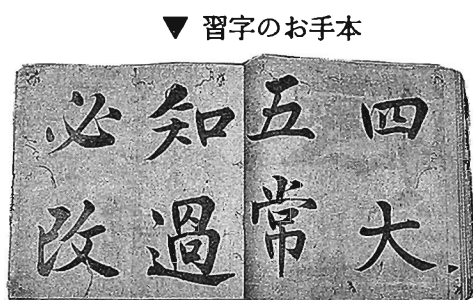
郷土を築いた人々

① 寺子屋の祖 高橋千里

享保二年（一七一七）今から約二百八十年位以前のこと、栗笠に高橋弥四郎という人が生まれました。本を読むことが大好きで、勉強を続けているうちにお弟子さんを集めて教える程になりました。そこで千里という号（別の名前）をつけて、自分の家で寺子屋を始めました。左上のようなお手本を使って習字を教えたほか、読書や珠算（ソロバン）も教えました。また能力を生かして、大津の代官の手代（役人）を勤めたこともありました。二八頁でも述べたように、笠郷には六つの寺子屋がありましたが、高橋千里の寺子屋はほかの寺子屋より百年も前に開かれていました。この人の名前が次第に有名になり、美濃はもちろんのこと遠くは伊勢（三重県）や尾張（愛知県）からも習いに集まったので、勉強

した寺子の数は五百人以上になったといわれています。

安永四年（一七七五）五十八歳で亡くなりましたが、先生を慕う門人たちが集まって、六年後に養老公園内の養老寺境内に、下の写真のような顕彰碑（活躍したことを世間に知らせる石碑）を建てました。



▶ 養老寺にある記念碑

② 下笠の文人 七里不着

下笠には江戸幕府の代官所がありました。初代の代官である石原清左衛門一重の時から、七里家という家来が仕えていました。代官所では、下笠地内に新田を多く開発してきただので、御家中組と呼ばれ代官所から特別の保護を受ける家来百姓も大勢住んでいました。

代官所が廃止となって代官が四日市へ移るときに、七里家は下笠に残って農家となり、御家中組を支配することになりました。不着はそれから約八十年余り後の天明元年（一七八一）に生まれ、豊次郎と名づけられました。幼いときから親孝行でやさしい子でしたが、やがて学問にも励むようになりました。中国の大変むつかしい書物を読んだり、不着という号（作品等につける別の名前）で俳句や短歌を作ったりもしました。

のちに不着は、家のことを長男の平三郎に任せて京都に住み、公家と呼ばれる身分の高い人や、位の高い僧侶とおつき合いを重ねました。年をとってからは下笠へもどってきて、俳句を作ったり仏教を信心したりして、ゆったりとした生活を送りました。文久元年（一八六一）八十歳で亡くなりました。

“掃除した 跡へころりと 落葉かな” 不着



▲ 公家から出された不着宛の手紙

③

公益につくした

渋谷代衛



幕末から明治の中頃にかけて、「大黒様」とも呼ばれ、笠郷の代表でもある人物がいました。渋谷代衛がその人です。代衛は文政七年（一八二四）、大野村で代々庄屋をつとめる家に生まれました。生まれつき温厚で人にも優しく親切でした。ふだんは質素な生活をして儉約を守りましたが、常に村人のために公共事業に力を尽くして大きな功績を残しました。

明治五年（一八七二）、日本に学校制度が出来たときには、

「ばやばやしていたのでは、この村が時代から取り残されてしまう。せつかくの機会がありながら勉強できないのでは、子どもたちがかわいそうではないか。」

と考へて、自分の家の一部を校舎にし、自分のお金で先生を集めて、明治六年に大野に立心第三学校を開きました。また子どもたちのために、本や筆記用具までも準備しました。

当時の輪中地帯は、毎年のように村を襲う水害に悩まされていました。代衛は毎年お金を出して郷土の堤防の修理にあたってきましたが、

「輪中の住民を水害から救うには、大きな堤を修築するよりほかはない。どの村も協力し合って身を守ろうではないか。」

と、自分の村はもちろん他の村々へも出かけて自分の考えを説いてまわりました。

やがて代衛の水防への願いが理解され、いくつもの堤防組合・水利土功会が作られることになり、村人たちは改めて代衛の人格をたたえました。

明治一二年（一八七九）、この代衛に岐阜県知事から、

「全国に名高い養老も、今のままではただの荒れた野山である。何とかここを開発して立派な公園にできないものだろうか。」

と相談を受けました。

代衛はさっそく郡内をかけ回り、力を貸してもらうように呼びかけました。集まった仲間とともに「偕楽社」というグループを結成して、知恵をしぼり財力をつぎこみました。道を作り、橋を整え、桜や楓をたくさん植えて、天下の名勝「養老公園」を開きました。

明治二四年の濃尾大震災で、代衛の住んでいる家も倒れてしまいましたが、残った材木

で小さな仮の住まいを作り、明治二十九年に亡くなるまで住み続けました。またとても親孝行で、母より先に寝ることもなかったといわれています。自分のしたことを名誉とすることもなく、公益に一生を尽くして大黒様そのもののような偉大な人でした。代衛が亡くなって七年後の明治三十六年（一九〇三）、彼をしのび業績をたたえる、大きくて立派な顕彰碑が公園内の唐谷のほとりに建てられました。



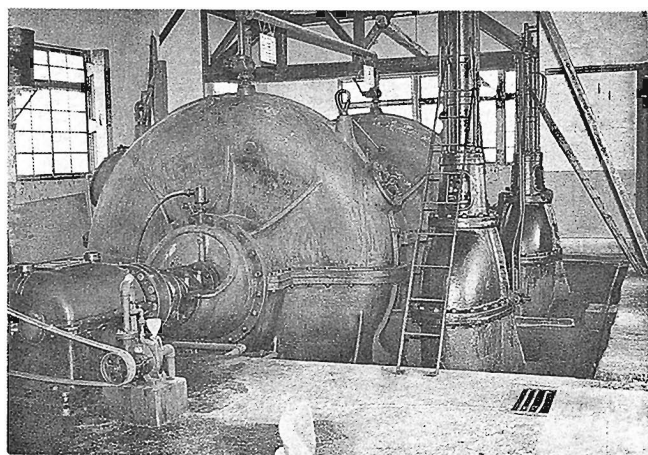
▶ 養老公園にある顕彰碑

④ 輪中の恩人 小野文五郎

小野文五郎は、下笠の和田で代々地主（田を貸して年貢米をもらう）をしていた家に、嘉永四年（一八五一）に生まれました。幼い頃から明るい性格で才能もあり、地域の人々から信頼されていました。大きくなってからは笠郷村村会議員をはじめ、数多くの役職について郷土のために働きました。

特に輪中地帯であったので洪水から村を守る治水事業や、低い土地にたまった悪い水を排除したり、田畑の土地を改良する仕事に献身的に尽くしました。江戸時代に作られた下笠輪中の水を小坪村まで落とす五三落江の自然排水だけでは、大雨が降ると田が水につかってしまうので、大正時代に排水機を作ろうということになりました。この時には皆の先頭に立って、寝ることや食べることも忘れる位にあちこちに出向いて働き、地域の人々からも感謝されました。

この排水機は、当時としてはイギリスの最新式の蒸気機関を使ってどんどん水をはき出したので人々を驚かせ、わざわざ見物に来る人もいました。昭和四年に亡くなった時には、笠郷村としてのお葬式が盛大に行われ、文五郎をしのぶ人達が数多く参列されたといわれています。



▲ 小坪にある笠郷排水機のポンプ

⑤ 栗笠の賢人 玉井五岳

玉井五岳は、教育面で大変活躍された人です。彼は明治十一年（一八七八）栗笠の専ら寺の三男として生まれました。とても賢い人で大垣中学校（今の太田北高）と第四高等学校を卒業した後、京都帝国大学に進学しようという時に、お兄さんに将来は何で身を立てるのかと聞かれて「文学を勉強したい。」と答えました。お兄さんは「好きな文学の勉強なら楽にできる。それより苦手な道を進んだほうがより一層の努力が必要で、それもまた人生を楽しむわけではないか。」と言われて、文学部でなく理学部と工学部の二つも卒業しました。学問を生かして東京高等商船学校や海軍機関学校の先生となり、途中にはヨーロッパやアメリカにも留学して研究しました。退職した後、京都で先生をしていましたが、晩年には故郷の



栗笠に帰って趣味の謡曲をたしなんだり、気軽に人々と接したりして親しまれていました。また信仰心が厚く、住職の代理として檀家に参られたりもされたので、今でも話題にされる方もいます。

昭和二十三年に亡くなりましたが、子孫の方が千葉県に住んでおられて、「海外にいる間には、百通以上の心温まる優しい手紙をいただきました。」と、お子様想いの方であったことを誇りにされています。

▼ 伊藤重松翁



明治三十年（一八九七）に下笠の三ツ屋で生まれた伊藤重松という人も、お米の増産ぞうさんに大変な努力をしました。「自分も植物になりきらないと、植物の状態じょうたいは分からない。」と欠かすことなく朝夕稲の育ちぐあいを観察かんさつし、土づくりに励みはげ、水かげんを見たりしたので、人々がびっくりする程沢山たくさんのお米がとれた。

養老郡はもちろんのこと海津・安八・本巢・羽島郡まで出かけて、お米作りを指導しました。教えを受けた人々が、末長く名人の名前を残そうと、昭和二十五年にこの石像を建てました。

▼ 川口銀蔵翁



⑥ お米作りの名人

かわぐちぎんぞう
川口銀蔵と伊藤重松

上之郷の農協倉庫の南に、稲の束を持ったユーモラスな石像が建っています。この人は明治十二年（一八七九）に上之郷村に生まれたお米作りの名人・川口銀蔵という人です。硫酸りゅうあんという肥料ひりょうを使ったり、この人独特どくとくの技術を研究して、一般には一反いったん（10アール）で五く六俵の収穫しゅうかくに対しても収穫しました。

そうです。特に戦前戦後のお米の少ない時代に「アンモニア水稲栽培法すいどうさいばいほう」を考えて、県内はもちろん、三重県や愛知県の人々にも教えました。上の石像も、この教えを受けた人々によって昭和三十七年に建てられました。

⑦ 郷土の画家 安田醉竹^{すいちく}

郷土を代表する画家安田醉竹は、明治二十三年（一八九〇）船附の法覚寺^{ほうかくじ}の長男として生まれました。お父さんやいとこに当たる人たちに絵や書・彫刻^{ちようこく}等に才能^{はつき}を発揮する人が多く、芸術的な雰囲気^{ふんいき}の中で成長しました。

当時は学問をする人も少ない時代でしたが、醉竹は大谷大学と大学院を卒業しました。絵が好きであったので、京都の有名な山田介石^{かいが}について絵画の技法を学び、山水画を描いていましたが、特に四君子^{しきんし}（竹・梅・菊・蘭）の中の竹を多く作品にしました。中でも朱竹^{しゅちく}（赤い色の竹）は幸運をもたらすという中国の諺^{ことわざ}があり、日本中に名前が広がって、「醉竹さんの朱竹^{しゅちく}」として有名になりました。晩年^{ばんねん}には社会事業に心を配り、郷土のために尽くしました。昭和四十七年に亡くなりました。

⑧ 仏教界の長老 藤井実応^{ふじいじつおう}

明治三十一年（一八九八）十月、船附の寺屋敷に一人の男の子が生まれました。この人が後に我が国の仏教界の最長老にまでなられた藤井実応大僧正^{そうじよう}です。父栄一、母フサの長男として生まれ、重吉と名づけられました。うそをついてはいけないときびしく育てられたので、子どもの頃にお使いのおつりの額を少なく言ったことでひどく叱^{しか}られたことを、い



▲ 醉竹の作品

つも気にして話されました。



のおぼうさんになる準備をととのえました。

大正十四年に宗教大学（今の大正大学）を卒業した後は、お寺の住職や学校の先生などをして布教活動（ふきょうくわつ）を続けました。わかりやすい言葉で宗祖・法然（ほうねん）の念仏（ねんぶつ）の教（きょう）えを説く、温厚で誠実な人といわれました。

昭和五十三年、浄土宗大本山増上寺（じやうどしゆ）の法主（ほふしゆ）、五十七年には浄土宗総本山知恩院（ちおんいん）の第八十五世門跡（もんせき）という位にもつきました。また全日本仏教界（しやうにほん）会（かい）長（ちやう）に就任（しゆうにん）されるなど仏教界で活躍されました。平成四年、九十三歳で他界（たかい）されました。生家の庭に遺徳（いとく）をたたえる石碑（いし）が建っています。

船附（ふねづき）の小学校を出ると、松坂屋（まつざかや）の前身（ぜんしん）である京都（きょうと）のいとう呉（こ）服店（ふくでん）に奉公（ほうこう）に出されました。番頭（ばんとう）さんについて見習（みなと）いをしていましたが、商売（か）上の駆け引き（かけひき）に心を痛めて商人（しやうじん）になることをあきらめました。そこで学問（がくもん）の道（みち）に進（すす）もうと、京都（きょうと）東山（とうざん）中（ちゆう）学校（がく）へ入学（にがく）し、新聞（しんぶん）配達（はいたつ）や人力車（じんりきしゃ）夫（ふ）などをしながら勉強（べんきやう）に励（はげ）みました。大正（たいし）八年（はち）に母親（はは）の急死（きゅうし）にあい、仏教（ぶつぎやう）を深く求めようと、南濃（なんのう）町の行基（ぎやうき）寺（じ）にて得度（とくど）（仏（ぶつ）の道（みち）に入る（い）ること）を受けて、浄土宗（じやうどしゆ）



藤井実応顕彰碑

あ　と　が　き

養老町町制四十周年記念事業
笠郷地区実行委員会委員長

伊　藤　泰　秋

この度、「ふるさと笠郷」を町制四十周年記念品として、全戸に配布することができました。地域の方々の格別のお骨折りとご協力に厚くお礼申し上げます。

この冊子は、笠郷のなりたちから現在までの移り変わりを多面的にとらえて、親しみやすくまとめられています。郷土の歴史を知り、先人のたゆまぬ努力のおかげで、私たちの現在の暮らしが成り立っていることを理解していただき、今後の発展に役立てば幸いです。

笠郷の子たちがこの本を核にして、今住んでいるふるさとに誇りを持ち、や・り・ぬ・く・子として頑張っていただくよう期待します。

ふるさと笠郷

○監　修

田中育次（養老町文化財保護審議会 会長）

○参考文献

養老郡志、養老町史（通史編）上・下、のびゆく養老町、郷土の治水、機関誌（養老町の文化財）、池辺の昔話、ふるさと広幡、ふるさと江東、ふるさと上多度、船着村史稿、笠郷村土地宝典

○発　行

町制四十周年記念事業実行委員会
養老町立笠郷小学校・PTA

○おわ　び

冊子編集にあたり、実には大勢の方々より資料提供があり、お話も伺いましたが、紙面の都合で略させて頂きますことをおわび申し上げます。有難うございました。

○刊　行

平成六年十一月吉日

○印　刷

有限会社　ダイヤ印刷
☎（五八四）七一一一九二

養老町民憲章

わたしたちの町、養老町は、緑の山、清らかな水に恵まれた歴史の町です。

わたしたちの、この美しいふるさとを、先人のたゆまぬ努力によって伸びつづけてきました。

わたしたちは、愛の輪をさらにひろげ、力をあわせて未来につづく明るい町をつくります。

一、おはよう こんにちは と元氣な声がわく町にしましょう。

一、美しい自然の中で 力いっぱい働ける町にしましょう。

一、おとしよりが 豊かにくらせる町にしましょう。

笠郷小学校校歌

朝日をあびて

ぼくらはうたう

あかるく肩をくみあって

笠郷笠郷笠郷のなかま

さあいっしょに行こう

ぼくらのゆくては

風かけめぐる

この青空のひろがりだ

夕日をうけて

わたしたちはうたう

やさしく手と手をとりあって

笠郷笠郷笠郷のなかま

さあいっしょに行こう

わたしたちのゆくては

花ぞののみち

もえたつ夢が咲きそう

われら笠郷小学校

われらのびゆくどこまでも

どこまでもどこまでも

たくましくたくましく

たくましく

服部 芳樹 作詞
小木曾 薫 作曲

「ふるさと笠郷」 正誤表

過日配布されました小冊子「ふるさと笠郷」に、一部誤りがありましたので
お詫び致します。次のように訂正をお願い致します。

箇 所	訂 正
五頁 六行目	象尾山 ← 象鼻山
五頁 十六行目	西 ← 右
八頁 八行目	下笠輪中の五つの村と ← 下笠輪中の下笠・大野・船附・栗笠の四つの村と

